福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1433 集

三宅遺跡群1

― 第7次調査報告 ―

2021

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1433 集

三宅遺跡群1

— 第7次調査報告 —

遺跡略号　MYK-7
調査番号　1931

2021

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。市内には埋蔵文化財をはじめとした重要な文化財が数多く残されており、近年の著しい都市化により失われるこれらを後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う三宅遺跡群第７次発掘調査について報告するものです。この調査では古代の掘立柱建物を検出するとともに、古代の須恵器や土師器、瓦などの遺物が出土しました。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和３年３月 25 日

福岡市教育委員会
教育長　星 子 明 夫

例　　言

1．本書は福岡市教育委員会が南区南大橋１丁目の集合住宅建設に伴い、令和元（2019）年７月 22 日から 10 月 25 日に発掘調査をした三宅遺跡群第７次調査の報告書である。
2．遺構の実測・写真撮影は加藤良彦・三浦萌が行った。
3．遺物の実測は三浦・立石・棚町・久富が行った。
4．遺物の写真撮影は三浦が行った。
5．製図は三浦・田中が行った。
6．本書に掲載した方位はすべて座標北である。
7．本書に掲載した座標は世界測地系である。
8．本書に使用した遺構略号はＳＢ＝掘立柱建物、ＳＫ＝土坑、ＳＤ＝溝、ＳＰ＝柱穴（ピット）、である。
9．本書に関わる図面・写真・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。
10．本書の執筆・編集は三浦が行った。

遺　跡　名	三宅遺跡群	調　査　次　数	７次	調　査　略　号	MYK-7
調 査 番 号	1931	分布地図図幅名	39　三宅	遺跡登録番号	2825
申請地面積	784.73㎡	調査対象面積	314.96㎡	調　査　面　積	276.11㎡
調 査 期 間	令和元年７月 22 日～令和元年 10 月 25 日			事前審査番号	30-2-880
調　査　地	福岡市南区南大橋１丁目 1169-1、1170-4				

目　　次

Ⅰ．はじめに ･････････････････････ 1
　1．調査に至る経緯 ･････････････････ 1
　2．調査の組織 ･････････････････････ 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 ･････････････････ 2
　1．地理的環境 ･････････････････････ 2
　2．歴史的環境 ･････････････････････ 2
Ⅲ．調査の記録 ･････････････････････ 5
　1．調査の概要 ･････････････････････ 5
　2．基本層序 ･････････････････････ 8
　3．遺構と遺物 ･････････････････････ 8
　　1）掘立柱建物 ･････････････････ 8
　　2）土坑 ･････････････････････ 8
　　3）小穴 ･････････････････････ 13
　　4）その他 ･････････････････････ 13
Ⅳ．まとめ ･････････････････････ 27

挿図目次

図１　三宅遺跡群周辺遺跡立地図
　　（1/25000） ･････････････････････ 3
図２　三宅遺跡群第1～7次調査地点
　　（1/2500） ･････････････････････ 4
図３　第７次調査区位置図（1/1000） ･･ 5
図４　調査区全体図（1/100） ･････････ 6
図５　調査区土層図（1/60） ･･････････ 7
図６　SB-041遺構実測図（1/40） ･･････ 9
図７　SK-001遺構実測図（1/20） ･･････ 10
図８　SK-001出土遺物実測図（1/3） ････ 11
図９　SK-004遺構実測図（1/20） ･･････ 12
図10　SK-004出土遺物実測図（1/3） ････ 12
図11　SK-014遺構実測図（1/20） ･･････ 13
図12　SK-014出土遺物実測図（1/3） ････ 14
図13　SP-028遺構実測図（1/10） ･･････ 15
図14　SP-028出土遺物実測図（1/3） ････ 15
図15　SP-028出土遺物実測図（1/3） ････ 16
図16　Ⅰ区出土遺物（1/3） ･･････････ 17
図17　Ⅰ区出土遺物（1/3） ･･････････ 18
図18　Ⅰ区出土遺物（1/3） ･･････････ 19
図19　Ⅰ区出土遺物（1/3） ･･････････ 20
図20　Ⅰ区出土遺物（1/3） ･･････････ 21
図21　Ⅰ区出土遺物（1/3） ･･････････ 22
図22　Ⅱ区出土遺物（1/3）
　　（71・72：1/1） ･･････････････ 23
図23　Ⅱ区出土遺物（1/3） ･･････････ 24
図24　Ⅲ区出土遺物（77：1/3）
　　（78：1/4） ･･････････････････ 25
図25　その他の遺構出土遺物（1/3） ････ 26
図26　三宅遺跡群高低差模式図
　　（縮尺不統一） ･･････････････････ 28

図版目次

図版１　１．Ⅰ区全景（北から）　２．Ⅲ区全景（北から）
図版２　１．Ⅱ区全景（東から）　２．SB-041全景（北から）
図版３　１．SK-001土層（西から）　２．SK-001（西から）
　　３．SK-004土層（西から）　４．SK-004完掘（東から）
　　５．SK-014土層（東から）　６．SK-014（東から）

Ⅰ．はじめに

１．調査に至る経緯

平成 30（2018）年 12 月 11 日付けで、福岡市南区南大橋１丁目 1169-1、1170-4（敷地面積：784.73㎡）における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会が福岡市教育委員会宛てになされた（事前審査番号：30-2-880）。

これを受けて経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である三宅遺跡群に含まれていることから、平成 31 年３月５日に工区内の一部において試掘調査を実施した。調査の結果、現地表下 110㎝において遺物包含層を、140㎝において遺構を確認したため、申請者と協議を重ねた結果、発掘調査を実施することとなった。

本調査は令和元年７月 22 日～ 10 月 25 日まで行い、報告書作成の整理作業は令和２年度に行った。

２．調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会

（発掘調査：令和元年度）

調査総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課　課長	菅波正人
	同課調査第２係長	大塚紀宜
庶　　務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝
事前審査：	埋蔵文化財課事前審査係	山本晃平
調査担当：	埋蔵文化財課調査第２係　文化財主事	加藤良彦
	同係文化財主事	三浦　萌

（整理・報告：令和２年度）

整理・報告総括：	経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課　課長	菅波正人
	同課調査第２係長	藏冨士寛
整理・報告庶務：	文化財活用課管理調整係	松原加奈枝
整理・報告担当：	埋蔵文化財課調査第２係文化財主事	三浦　萌

Ⅱ．遺跡の立地と環境

１．地理的環境

玄界灘と背振・三郡山系に挟まれた福岡市には、糟屋、福岡、早良、今宿の４つの平野が広がっている。そのうちの一つである福岡平野を流れる那珂川と御笠川の周囲には浸食の進んだ丘陵や段丘が残されている。当遺跡はその那珂川西岸の沖積地上に位置する。大正末から昭和初期の地形図を見ると当該地域は南東に開く谷の開口部の山裾に位置しており､周辺は田んぼであったことがうかがえる。

２．歴史的環境

三宅遺跡群は東西に約 500 m、南北に約 250 mの規模を持つ主に奈良～平安時代の遺跡によって構成されている遺跡群である。2015 年に三宅Ａ遺跡、三宅廃寺、三宅瓦窯跡、三宅岩野瓦窯跡、そして大橋Ｃ・Ｄ遺跡を包含して称されることとなった。過去においては「三宅廃寺」「三宅Ａ遺跡」として調査がされており、今回は数えて７度目の調査となる（表１参照)。

三宅遺跡群が主に存在していた７世紀～９世紀の周辺遺跡としては那珂君休遺跡、板付遺跡、麦野遺跡、雑餉隈遺跡、井相田Ｃ・Ｅ遺跡、高畑遺跡、井尻Ｂ遺跡、そして郡衙推定地である那珂遺跡群などがある。このうち那珂遺跡群、那珂君休遺跡、板付遺跡、井相田Ｃ・Ｅ遺跡、高畑遺跡において大宰府から水城東門を経て博多遺跡群方面へ向かう官道東門ルートが確認されている。また高畑遺跡と井尻Ｂ遺跡では古代寺院の可能性がある遺構が発見されている。近くの野間Ｂ遺跡４次調査で西門ルートが出ているが、大橋Ｅ遺跡でも三宅廃寺に通じる道路と新羅焼が出土している。

三宅遺跡群は遺跡群に含まれているとおり三宅廃寺がかつて存在していた場所であるとされている。過去の調査の中では遺跡群のほぼ中央部で行われた第一次調査で瓦溜から観世音寺の創建瓦である老司Ⅰ式軒丸瓦、掘立柱建物と土坑から老司Ⅱ式軒丸瓦が出土している。このことから三宅廃寺の築造年代は７世紀後半～８世紀初頭であり、その他の出土遺物からその存続期間は９世紀前半までにわたる可能性があることが判明した。その後おこなわれた第２次調査でも区画溝や掘立柱建物、老司Ⅰ式軒平瓦や「寺」銘の墨書・刻書土器、転用硯や燈明皿などが出土し、当該地域が寺院跡である可能性が高まっている。しかし未だに全容が判明しているわけではなく、今回の調査を含めて今後の調査に期待がされている。

【参考文献】
・福岡市教育委員会　1979　『三宅廃寺』
・福岡市教育委員会　2004　『三宅廃寺２』
・福岡市教育委員会　2004　『三宅廃寺３』

調査年	調査次数	遺構、遺物	市報	備考
1977	1	掘立柱建物・土坑・溝・瓦溜（古代）	50	
2002	2	溝（古墳）、掘立柱建物・土坑・溝（古代）、土坑（中世）	826	
2002	3	溝・柱穴（古代）	827	
	4	溝・柱穴（古代）		
	5	溝・土坑・柱穴（古代）		
2001	1	土坑	年報	三宅Ａ遺跡としての報告
2019	7	掘立柱建物・土坑・溝・杭（古代）、水田（中世）		本報告

表１　三宅遺跡群における過去の調査一覧

1.三宅遺跡群　2.大橋E遺跡　3.野多目C遺跡　4.井尻B遺跡　5.比恵遺跡群　6.那珂遺跡群
7.雀居遺跡　8.那珂君休遺跡　9.板付遺跡　１０.高畑遺跡　１１.立花寺遺跡　１２.中村町遺跡
１３.井相田C遺跡、仲島遺跡　１４.麦野A~C遺跡　１５.雑餉隈遺跡

図１　三宅遺跡群周辺遺跡立地図（1/25000）

1：三宅遺跡群　2：三宅廃寺　3：三宅A遺跡　4：三宅岩野瓦窯跡
5：大橋C遺跡　6：三宅瓦窯跡　7 大橋D遺跡

図２　三宅遺跡群第１～７次調査地点（1/2500）

Ⅲ．調査の記録

１．調査の概要

今回報告する三宅遺跡群第７次調査地は南区南大橋１丁目１１６９－１、１１７０－４に所在する。近隣の調査としては調査区南西隣接地において三宅廃寺第１次調査が行われている。特に瓦溜から確認された老司式軒丸瓦によって三宅廃寺の存在が推定されている。

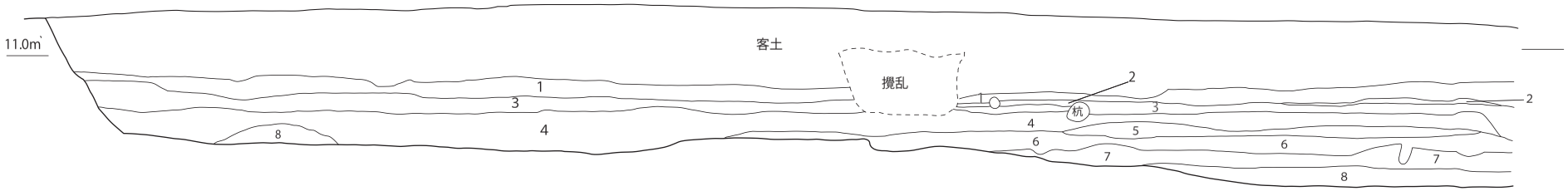
発掘調査は，当該工事の地下へ影響が及ぶ 314.96㎡を対象とした。廃土処理の関係上、調査区をＬ字状に３分割した。まず東側半分をⅠ区として調査し、Ⅰ区調査終了後に西側半分をⅡ区、Ⅰ区北側の凸部をⅢ区として調査を行っている。Ⅰ区東側において地表面から約 102㎝で遺物包含層が、西側において同じ高さで遺構が確認されたため、この上面までの表土の鋤取りを行った後，人力で遺構の検出及び掘削，遺構実測，写真撮影を行った。発掘調査は令和元年７月 22 日に開始し、令和元年 10 月　日に終了している。

本調査区で検出された遺構は古代の掘立柱建物が１棟、土坑３基、溝２条、杭跡と考えられるピット群、そして中世の水田面である。出土遺物等のほとんどは瓦である。掘立柱建物は２間×３間の規模が確認できており、三宅廃寺の寺院域を構成する建物である可能性が非常に高い。

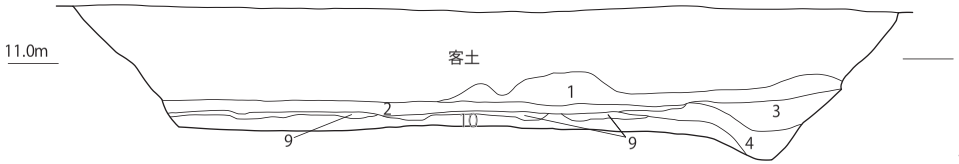
図３　第７次調査区位置図（1/1000）

図４　調査区全体図（1/100）

Ⅰ・Ⅲ区東壁土層

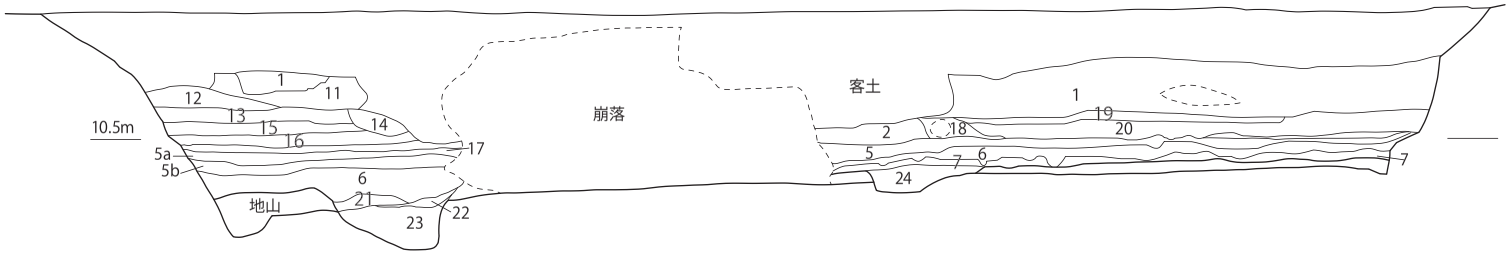


Ⅲ区北壁土層



1　暗灰色土：田の土
2　暗褐色土：床土、砂質土
3　暗褐色土：溝上層、砂質
4　白色土：溝下層、砂質
5　明褐色土：包含１層、全面に鉄分とマンガンが沈着、砂質
6　黒色粘質土：包含２層、上半分にマンガン・鉄分が沈着
7　黒色土：包含３層、地山ブロック混じり、砂質
8　緑白色粘質土：地山、鉄分・マンガン混じり
9　５層と同一
10　明橙色土：地山、シルト、しまり強い、ところどころに緑白色粘質土が混じる
11　暗褐色砂質土
12　茶褐色砂質土
13　茶褐色砂質土
14　暗灰色砂質土
15　褐色砂質土
16　褐色砂質土
17　濃橙色砂質土
18　褐色砂質土：灰色土まじり
19　褐色砂質土：18層より多くの灰色土を含む
20　褐色砂質土：18・19層より多くの灰色土を含む
21　黒色粘質土：地山ブロックを少し含む
22　黒色粘質土：地山ブロック混じり
23　黒色土：砂を含む
24　暗褐色粘質土：丈夫にマンガン沈着

Ⅱ区西壁土層



0　2m

Ⅱ区北壁土層

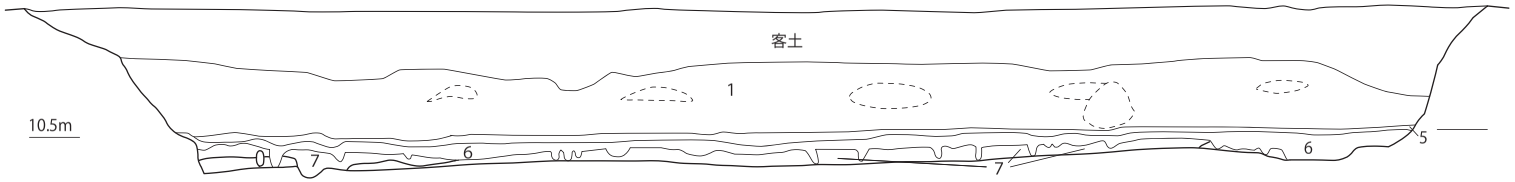


図５　調査区土層図（1/60）

２．基本層序

基本的には地表面から約１ｍは客土または耕作土であり、遺構検出面に包含層が１～３層堆積しているという層序をとる。調査区Ⅰ・Ⅲ区の東壁土層を見ると地表から最大60㎝ほどある客土の下にに耕作土である１・２層が20㎝弱堆積する。Ⅲ区では中世以降の溝が壁沿いに存在しており、その堆積土３・４層がⅢ区側からⅠ区にかけて堆積する。その後、Ⅰ区では包含層１～３層である５・６・７層が約40㎝堆積し、遺構検出面に至る。Ⅲ区北壁土層も層の厚さ以外はほぼ同様の堆積を示すが、遺構検出面である地山の土色が異なる。Ⅱ区は少々異なる堆積を示す。西壁土層を見ると客土と耕作土である１層の下に約20㎝の砂質土層か堆積し、その下に包含１～３層である５～７層が堆積する形をとる。一方でⅡ区北壁土層をみると砂質土層はみられず、耕作土の直下から包含１～３層が堆積することとなる。

３．遺構と遺物

１）掘立柱建物

調査区の北部で掘立柱建物が一棟確認できた。

ＳＢ－０４１（図６）

調査区北部で確認された主軸方位Ｎ－３°－Ｅにとる２間×３間の掘立柱建物である。南側桁行全長6.42ｍ、柱間は西から2.2m、2.08m、2.32ｍ。北側桁行全長6.4ｍ、柱間は西から東西長3.72ｍである。北側桁行全長6.2ｍ、柱間は西から2.16ｍ、2.28ｍ、1.96mである。西側梁行全長3.56m、東側梁行全長3.72ｍ、柱間は北から1.84ｍ、1.88ｍである。ＳＰ―００９、０２３、０２９、０３０、０３１、０３７、０３８、０３９、０４０で構成される。柱穴は隅丸方形に近い形をとる。図示できる遺物はないものの出土した縄目叩きのみられる瓦等から８世紀ごろの建物であると考えられる。

２）土坑

３基の土坑が発見された。

ＳＫ－００１（図７）

Ⅰ区北部、調査区全体の中央付近で発見された長軸14.2ｍ、短軸1.34ｍ、深さ0.52ｍの土坑である。埋土は褐色土、黒色土、暗灰色粘質土であり、褐色土は耕作土の可能性がある。ＳＢ－０４１を構成するＳＰ－００９を切っているようにみえるものの、検出が不明瞭であったこともありＳＢ－０４１よりも新しい時期であるとは断言できない。

出土遺物（図８）

出土遺物はいずれも破片の状態で出土した。１は高台径8㎝、残存高2.1㎝の赤焼きの須恵器の坏である。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、内面の底面はナデである。底部付近が1/4程残存している。２は高台径8㎝、残存高2.8㎝の黒色土器Ａ類の坏である。内面にわずかにミガキが残るものの、外面の調整は摩滅しており不明である。底部付近が1/5程残存している。３は軒丸瓦であり、凹面に布目が確認でき、側面はヘラ切りが施されている。残存長16㎝、厚さ1.6㎝である。

ＳＫ－００４（図９）

調査区西側中央付近においてⅠ区とⅡ区を跨いだ形で発見された。長軸1.36ｍ、短軸1.1ｍ、深さ0.52ｍの規模である。埋土は主に黒色砂質土であり、底面に近づくにしたがって粘質土や粘土を含む

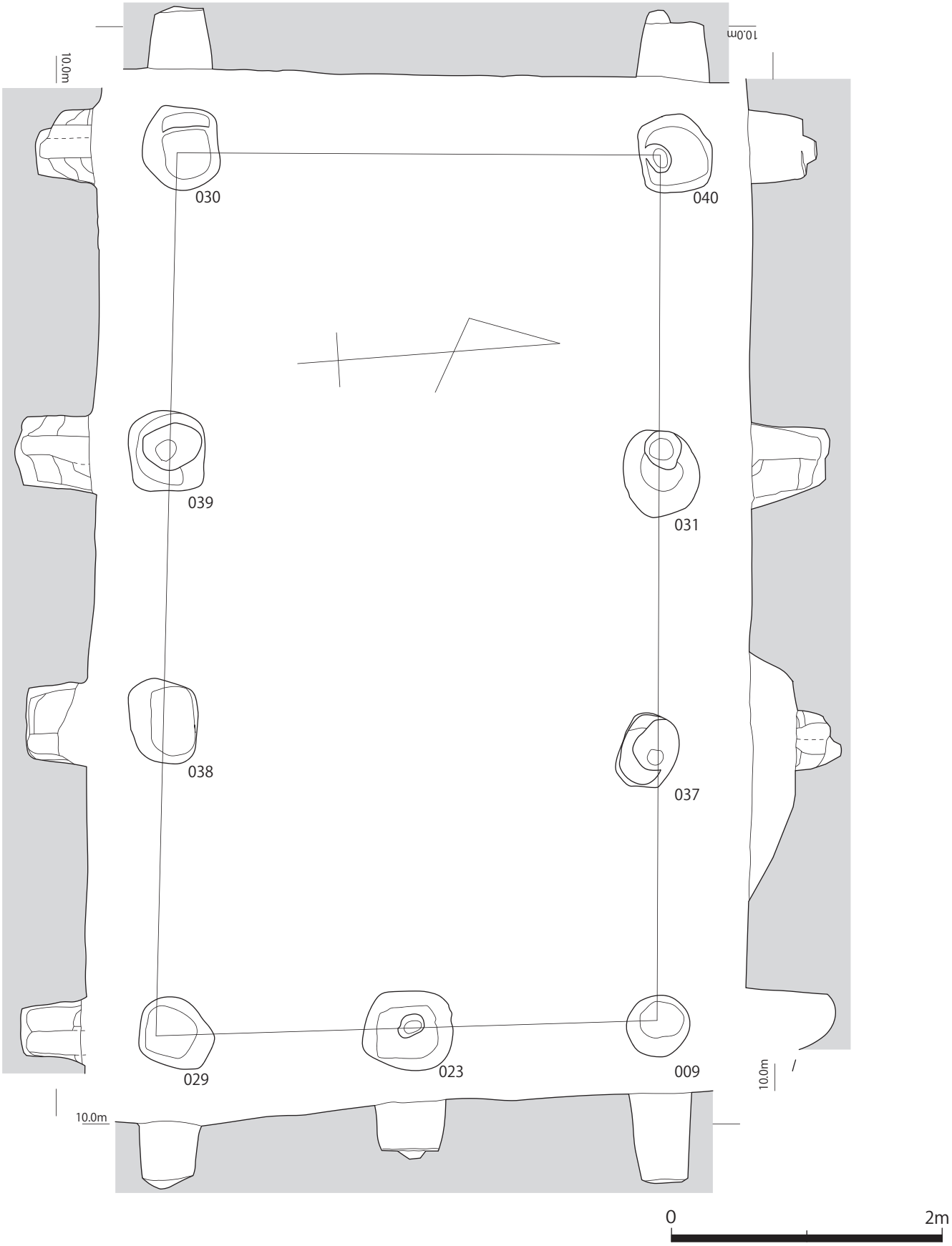


図６　SB-041 遺構実測図（1/40）

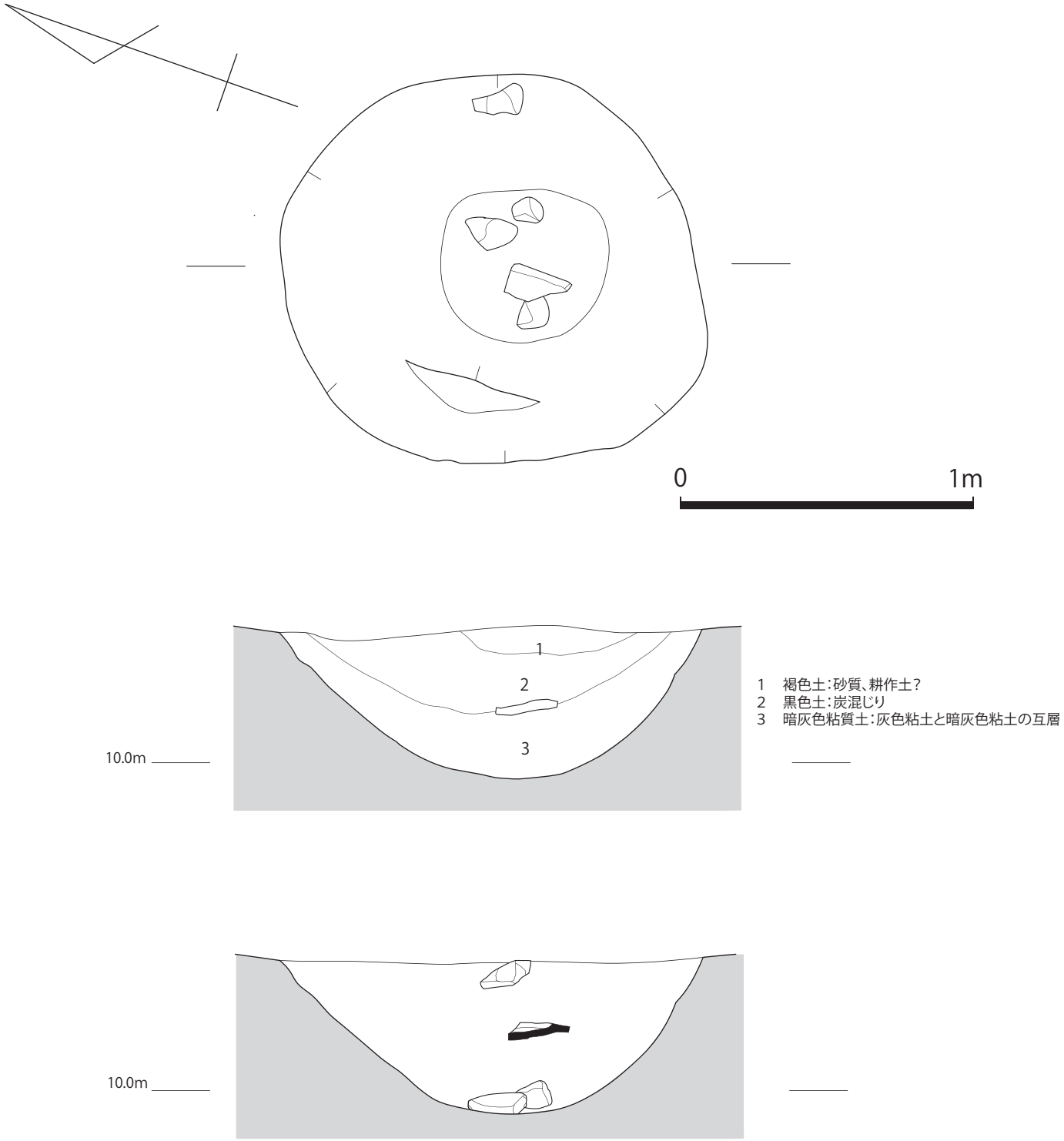


図７　SK-001 遺構実測図（1/20）

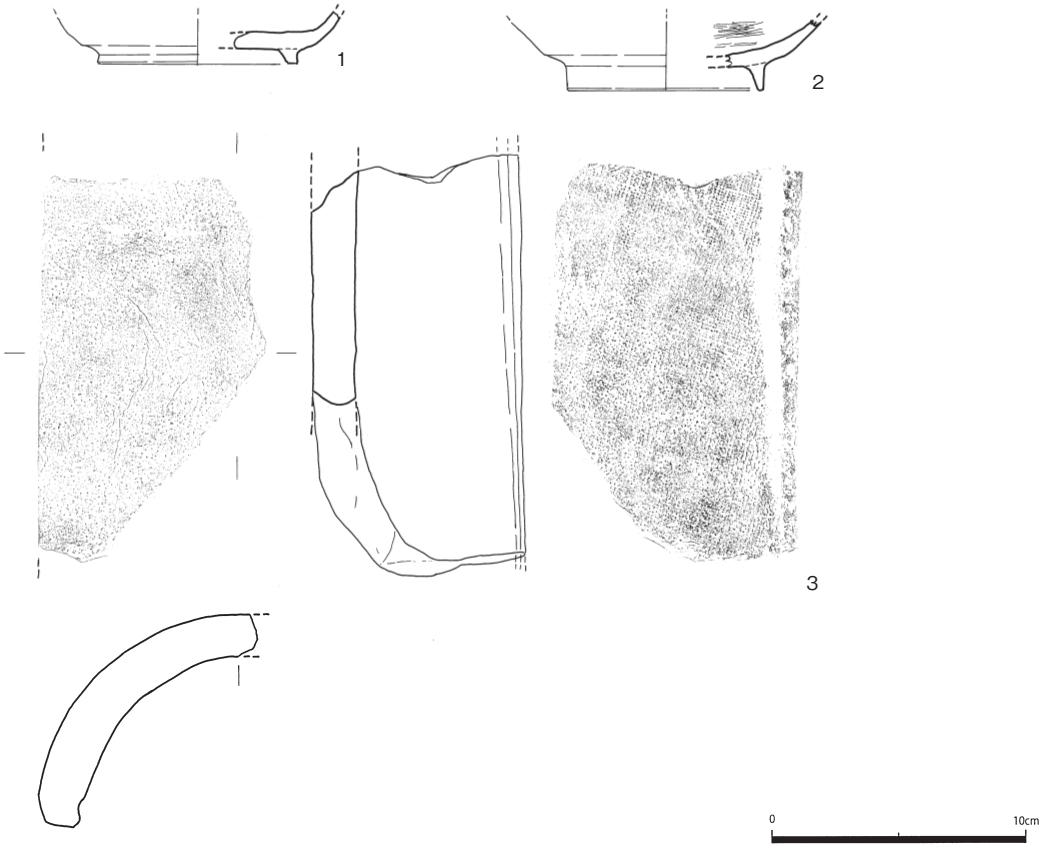


図８　SK-001 出土遺物実測図（1/3）

ものになる。包含２層を切っていることから中世以降に掘られたものといえる。

出土遺物（図１０）

出土遺物はいずれも破片の状態で出土した。４はカマドの脚部片である。残存高は 12.8cm であり、外面調整はタテハケ、内面調整はケズリである。裾部はナデが施されている。５は高台径9㎝、残存高2.3㎝の赤焼きの須恵器の坏である。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、内面の底面はナデである。底部付近が 1/6 程残存している。６は高台径 8㎝、残存高 2.3㎝の土師器の坏である。内面の一部にヨコナデがみられるものの、大半が摩滅しており不明である。底部付近が 1/4 程残存している。

ＳＫ－０１４（図１１）

調査区Ⅱ区北部で発見された長軸 1.06 m、短軸 0.92 m、深さ 0.44 mの土坑である。堆積状況から一度埋没したのちにもう一度掘りなおした可能性が考えられる。上面で土師器の小形甕が発見された。

出土遺物（図１２）

７は土師器の小形甕である。土坑の上面で発見された。口径 19㎝、高さ 16.05㎝でありほぼ完形となる。外面調整はタテハケ、内面調整はケズリである。内外面ともに底部付近の調整は摩滅しており不明である。浅黄橙の胎土を呈する。８は高台径 10㎝、残存高 1.7㎝の土師器の坏である。内外面ともにナデを施されている。底部付近が 1/4 程残存している。９は弥生時代前期の甕の口縁部である。他の遺物との流れ込みであると考えられる。きざみがみられる。１０はカマドの庇部分である。庇の上部分の調整はハケ、庇上部の調整はヨコナデを施した後にハケ、庇下部の調整はハケであり工具による調整の痕が残っている。

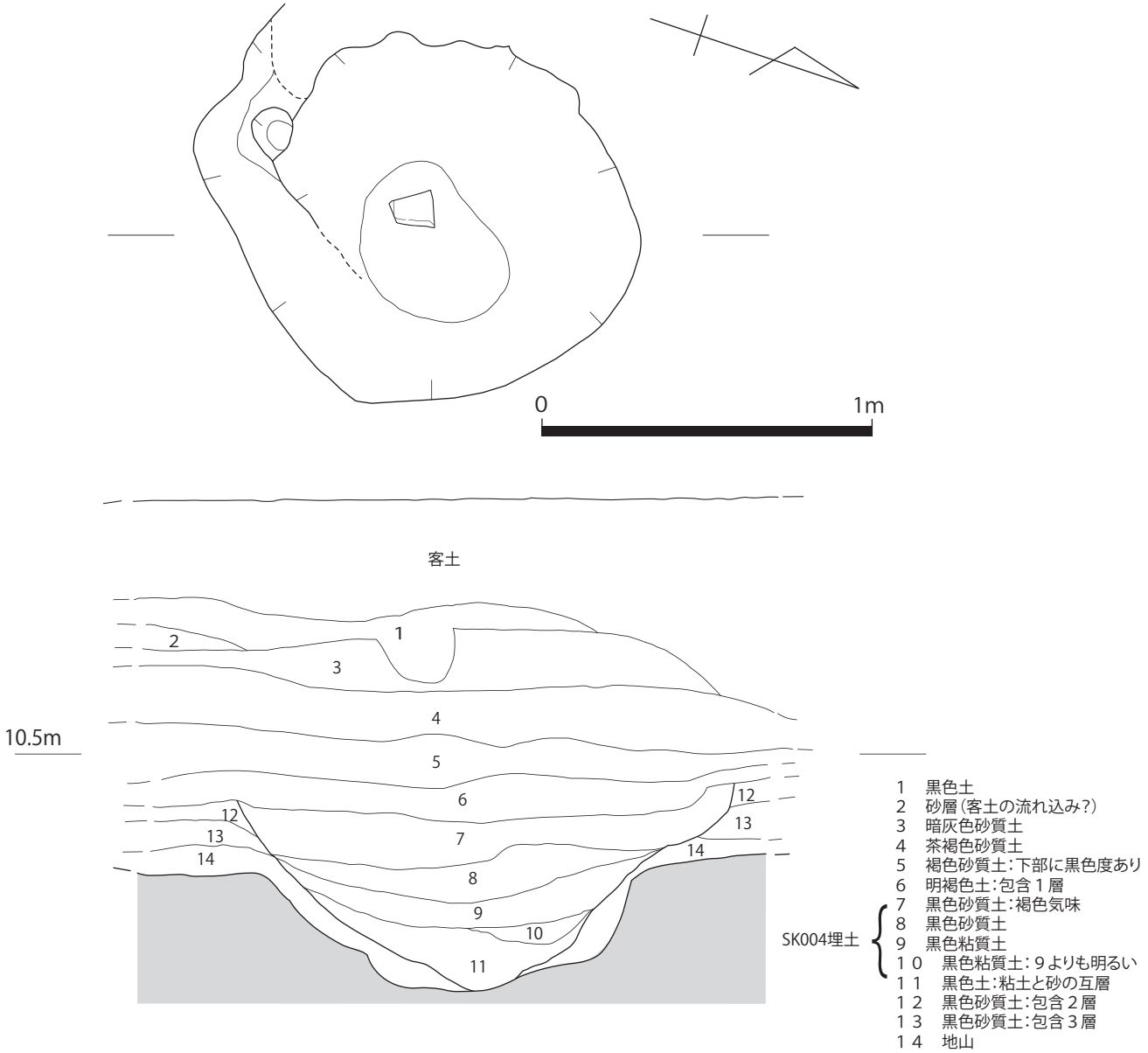


図９　SK-004 遺構実測図（1/20）

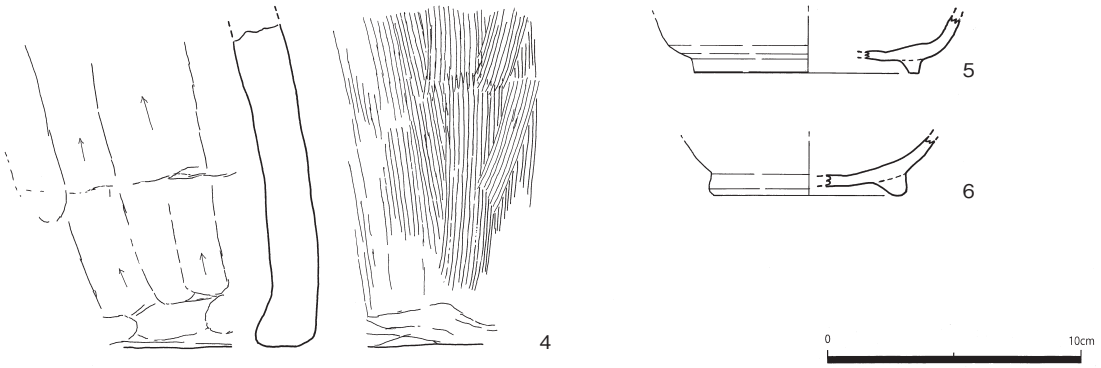


図 10　SK-004 出土遺物実測図（1/3）

３）小穴

ＳＰ－０２８（図１３）

ＳＰ－０３７の北東側に位置する柱穴もしくは小穴である。0.5 m × 0.52 m、深さ 0.19 mの規模であり、掘立柱建物を構成する柱穴と類似した形態をとるが、調査区内において確認することはできていない。建築部材と考えられる木製品と丸瓦をはじめとした瓦が出土した。ＳＰ－０３７をわずかながらきっているため、ＳＢ－０４１よりも新しい時期のものであると考えられる。

出土遺物（図１４，１５）

１１は丸瓦である。厚さ 1.6 ㎝、残存長 15.8㎝、残存幅 9.3㎝。凸面は左撚りの縄目、凹面には布目が確認できる。側面はヘラ切りが施されている。１２・１３は建築部材と考えられる木製品であるが、どの部位であるかは不明である。どちらも　穴が確認できる。１２は厚さ 3.2 ㎝、幅 8.1㎝、残存長 47.5㎝である。１３は厚さ 2.9㎝、残存幅 5.2㎝、残存長 46.5㎝である。同一部材であったものが分離した可能性もある。

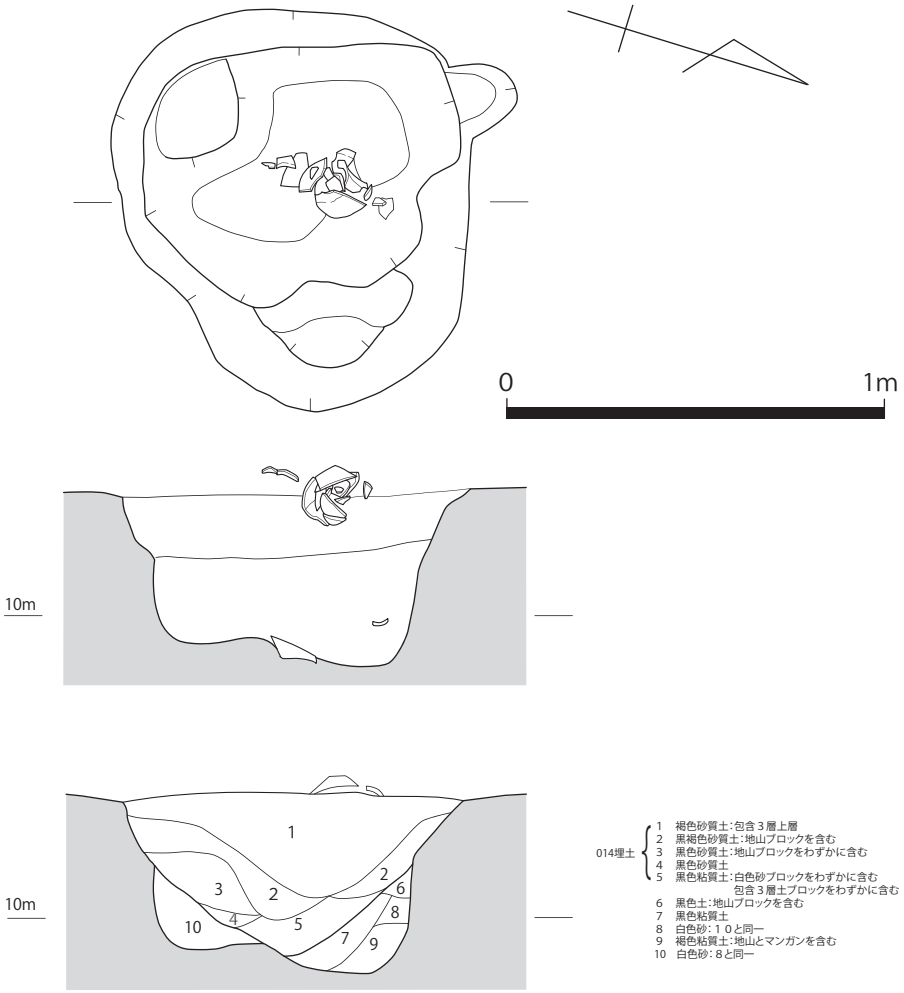


図 11　SK-014 遺構実測図（1/20）

４）その他

遺構検出面上に存在した包含層から出土した遺物とその他の遺構から出土した遺物について述べる。包含層出土遺物は調査区ごとに報告する。いずれも破片が主であり、口径・高台径ともに復元したものがほとんどである。いずれも中世以降の包含層である。

Ｉ区出土遺物（図１６～２１）

Ｉ区を調査中に発見された遺物である。ほとんどが破片の状態で出土した。

１４～２１は包含層１層から出土した。１４～１６は須恵器の坏身である。１４は高台径 8㎝、残存高 1.7㎝である。内面はケズリ風のナデ、外面の側面は回転ヨコナデ、底面が回転ヘラケズリである。底部付近が 1/8 ほど残存している。１５は高台径 8.4㎝、残存高 2.3㎝である。内外面ともに側面は回転ヨコナデ、底面はナデである。底部付近が 1/3 ほど残存している。１６は高台径 10㎝、残存高 2.2ｃｍであり、赤焼きである。内外面ともに回転ヨコナデが施されているが、内面の底面はナデ調整で

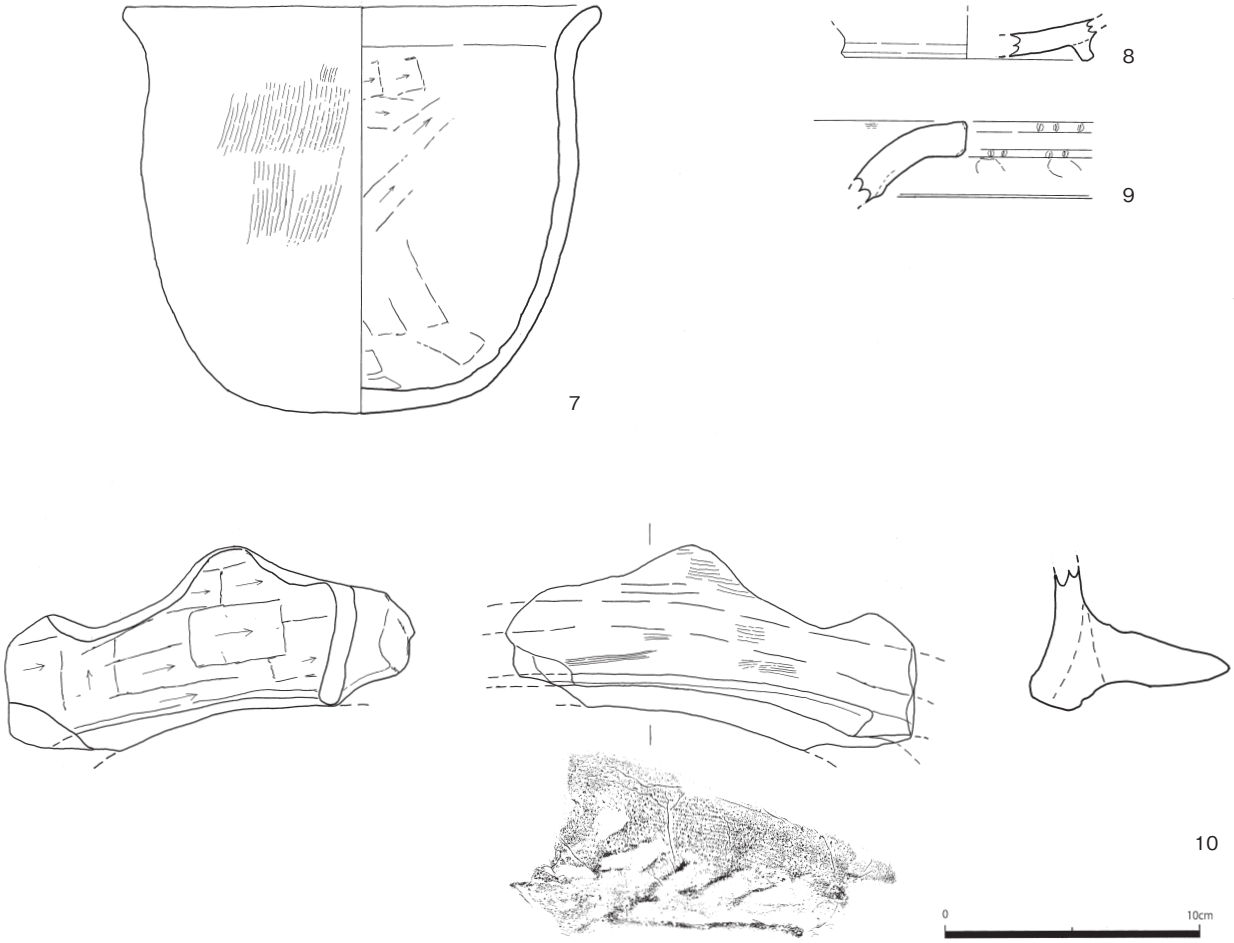


図 12　SK-014 出土遺物実測図（1/3）

ある。底部付近が 1/8 ほど残存している。１７・１８は土師器の坏身である。１７は高台径 8cm、残存高 2.1cmである。内外面調整はナデである。底部付近が 1/8 ほど残存している。１８は高台径 8cm、残存高 2.2cmである。内面調整は摩滅しており、外面調整は剥離のため不明である。底部付近が 1/3 ほど残存している。１９は高台径 4.6cm、残存高 1.7cmの黒色土器Ｂ類である。内面調整にミガキ、外面調整は底面がナデ、側面から高台にかけてはヨコナデである。黒色を呈する。高台付近のみ出土した。２０は越州窯系青磁の口縁部片である。口径 18cm、残存高 4.5cm。口縁部付近の 1/7 程が残存している。２１は白磁碗である。残存高 4.9cmであり、白磁Ⅳ類である。２２～２５は包含層２層から出土した。２２は須恵器の蓋である。口径 16cm、残存高 1.8cmである。外面調整は回転ヘラケズリと回転ヨコナデ、内面調整は回転ヨコナデとナデである。1/10 ほどが残存している。２３は須恵器の坏身である。高台径 7.4cm、残存高 2.9cmである。内面は回転ヨコナデとナデ、外面はナデ、高台は回転ヨコナデが施されている。底部付近が 1/6 ほど残存している。２４は土師器の大皿である。口径 15cm、残存高 3.8cmである。底部は回転ケズリが施された後にナデが施されている。1/3 ほどが残存している。２５は白磁碗の口縁部でありⅣ類である。２６～２８は包含２～３層の間で出土した。２６・２７は須恵器の坏である。２６は高台径 8.8cm、残存高 2.7cmである。内外面ともにナデと回転ヨコナデが施されている。外面には一部ケズリがみられる。底部付近が 1/5 ほど残存している。２７は高台径 8cm、残存高 3cmである。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、外面の一部に回転ケズリがみられる。底

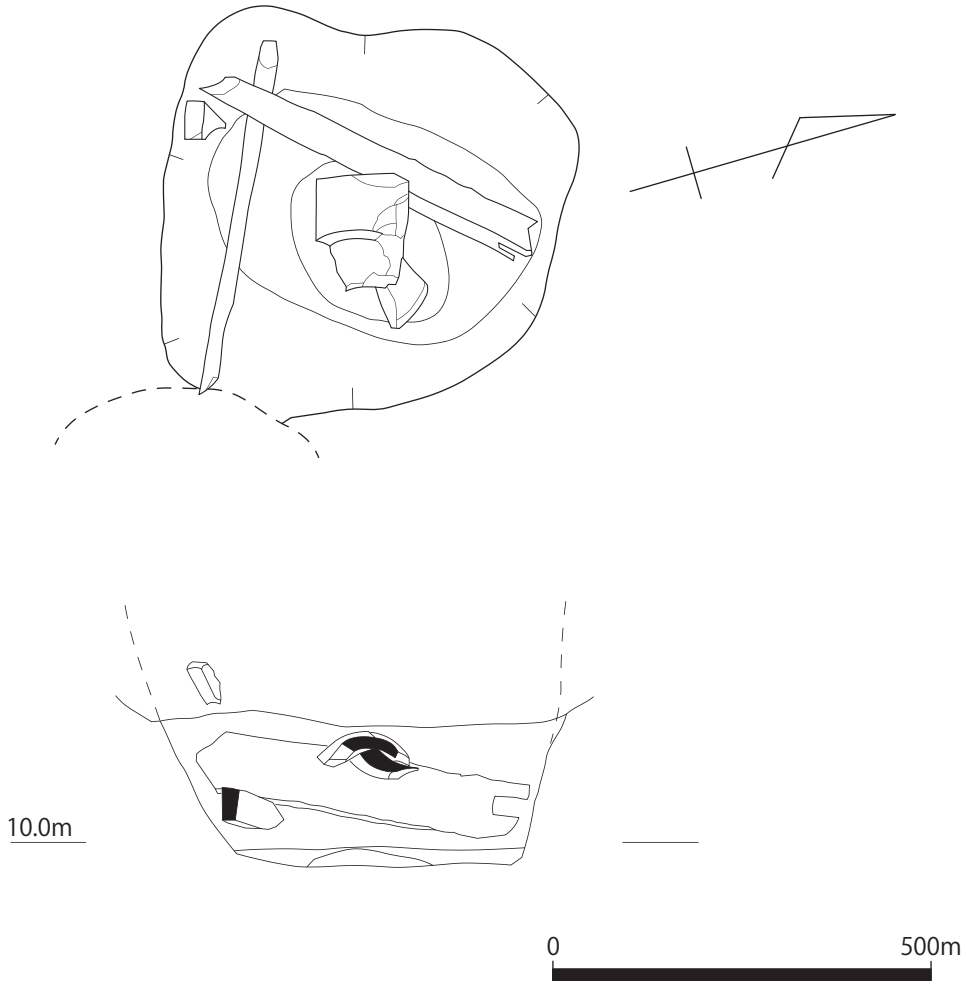


図 13　SP-028 遺構実測図（1/10）

図 14　SP-028 出土遺物実測図（1/3）

図 15　SP-028 出土遺物実測図（1/3）

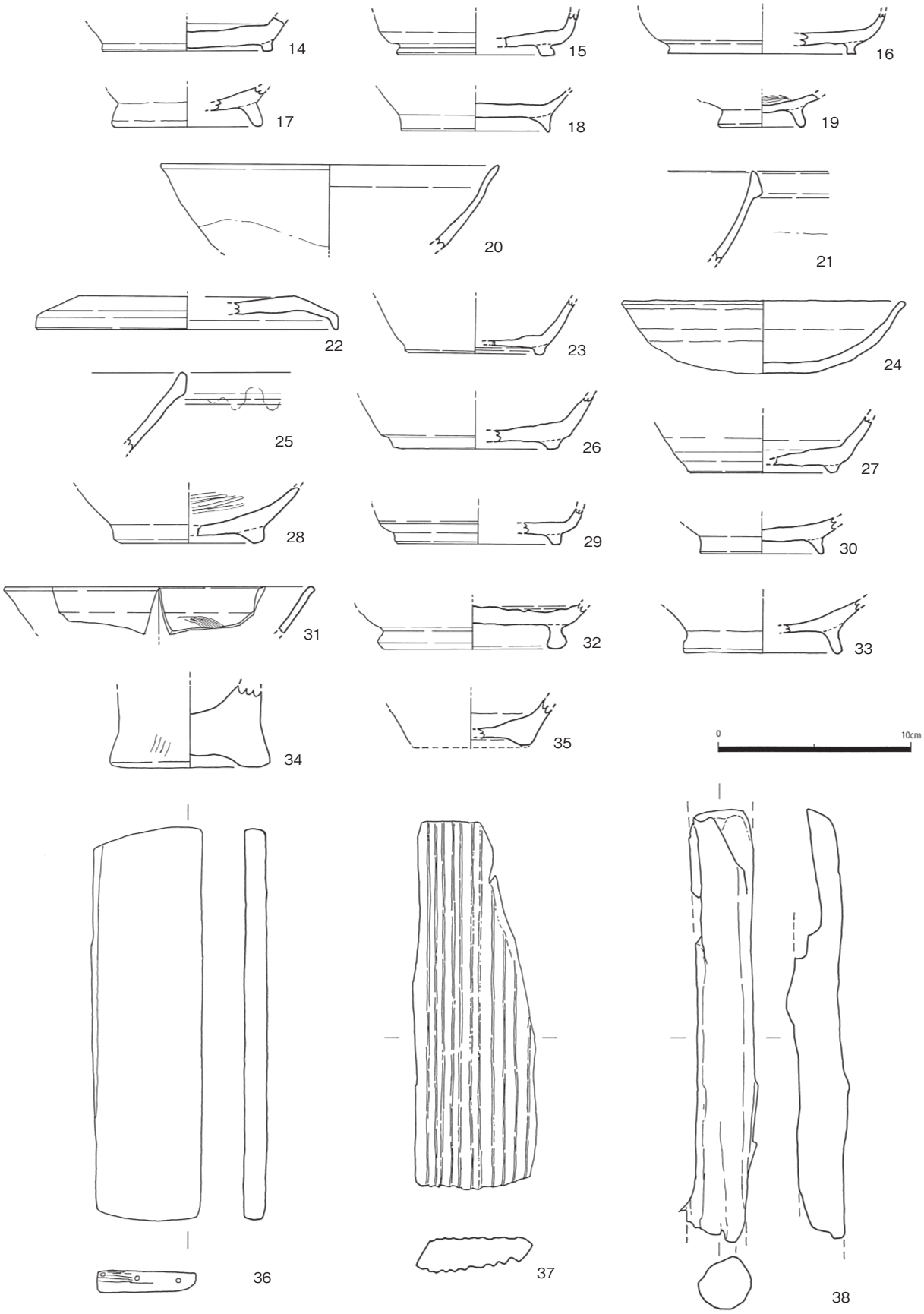


図 16　Ⅰ区出土遺物（1/3）

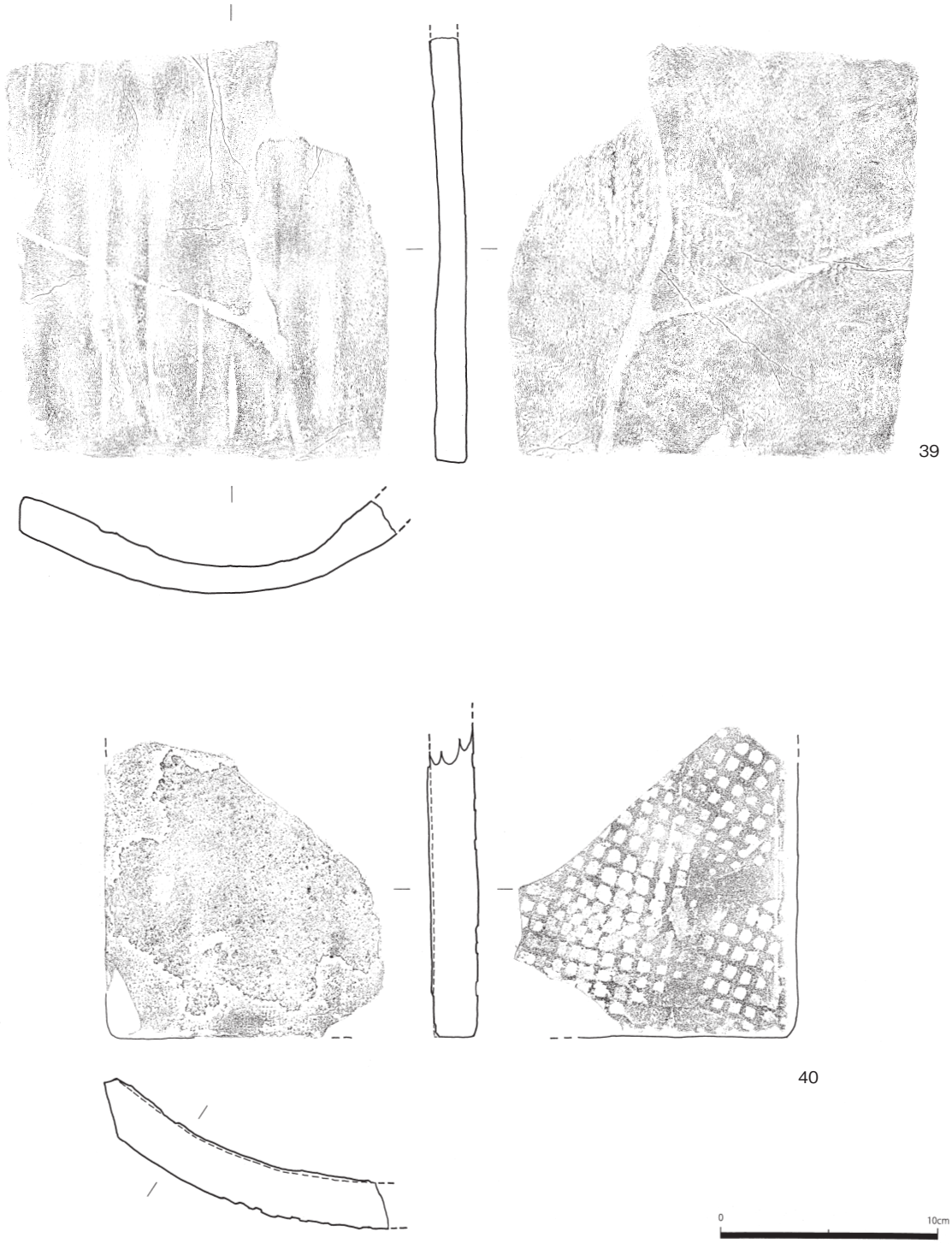


図 17　Ⅰ区出土遺物（1/3）

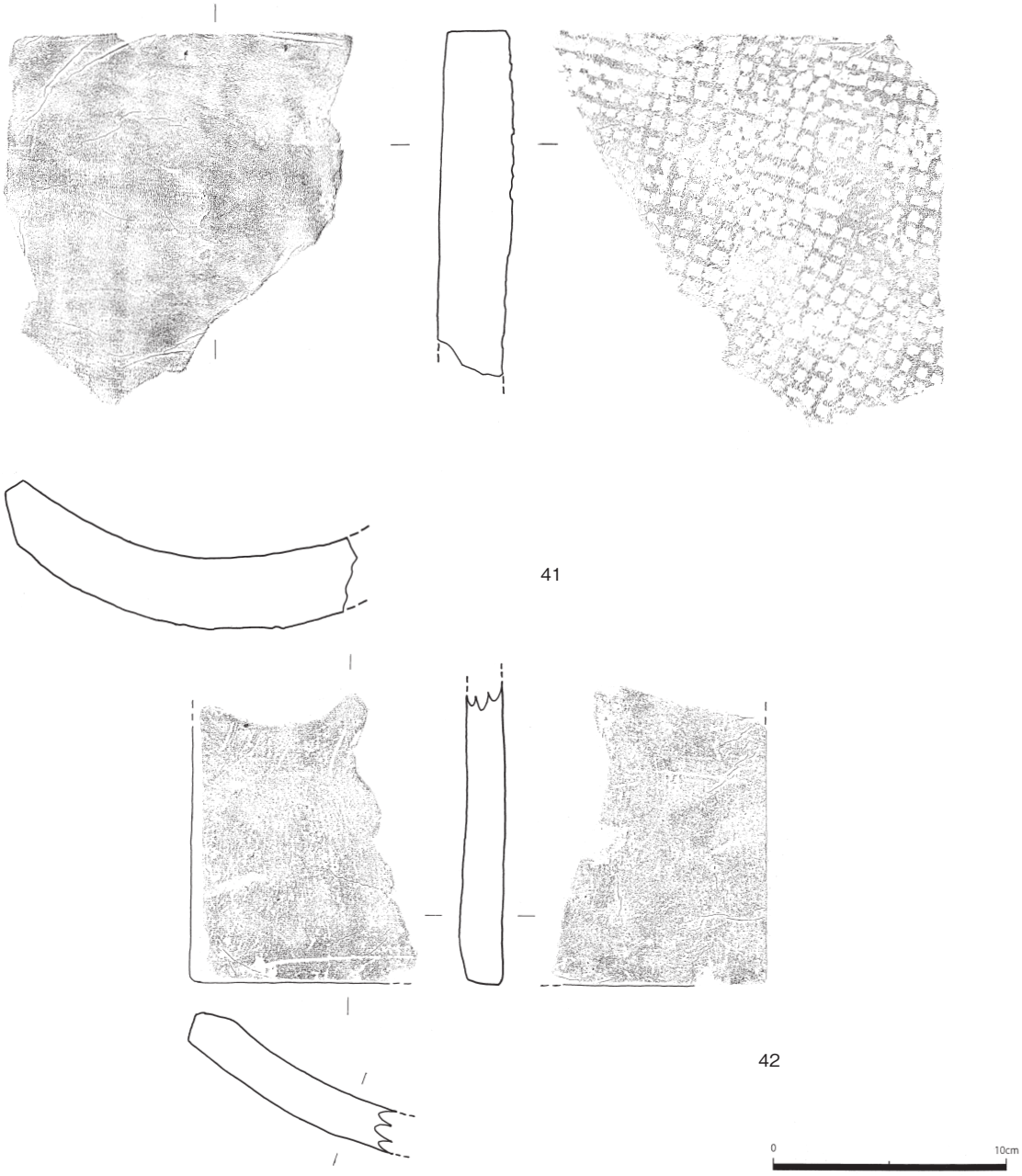


図 18　Ⅰ区出土遺物（1/3）

部付近が 1/5 ほど残存している。２８は土師器の坏である。高台径 8cm、残存高 2.8cmであり、内面にミガキが見られる。底部付近が 1/2 ほど残存している。２９～３１は包含層３層で出土した。２９は須恵器の坏である。高台径 8.8cm、残存高 1.9cmである。内外面ともに回転ヨコナデが施されている。３０は土師器の坏である。高台径　cm、残存高　cmである。３１は同安窯系と思われる青磁埦の口縁部の破片である。３２～３８は遺構検出面直上で発見された。３２は須恵器の坏である。高台径 10cm、残存高 2.3cmである。内面調整は回転ヨコナデ、外面調整はナデである。高台には回転ヨコナデが施されており、底部に板圧痕が残っている。３３は土師器の坏である。高台径 8.4cm、残存高 2.9cmである。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。底部付近が 1/3 ほど残存している。３４と３５

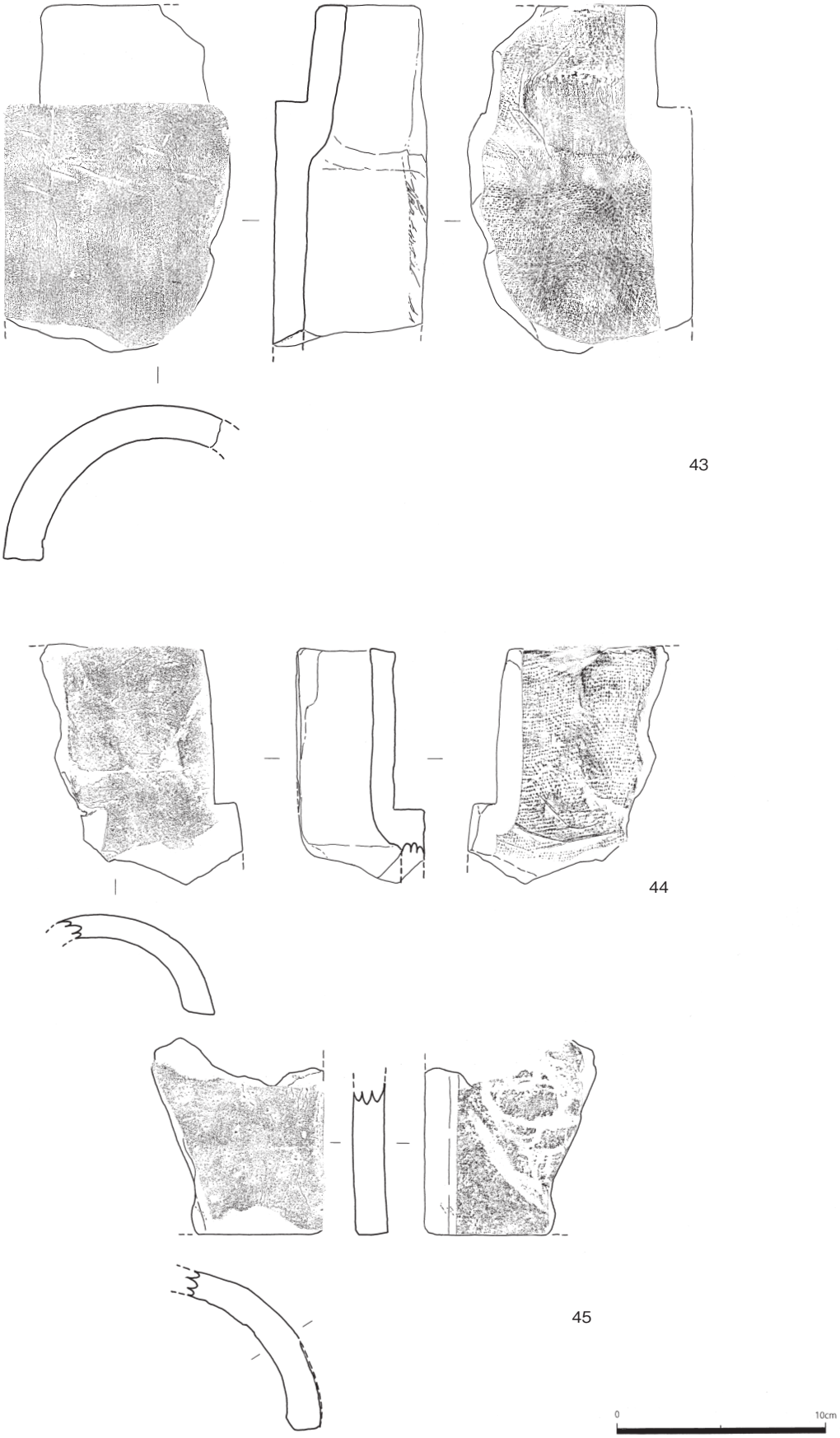


図 19　Ⅰ区出土遺物（1/3）

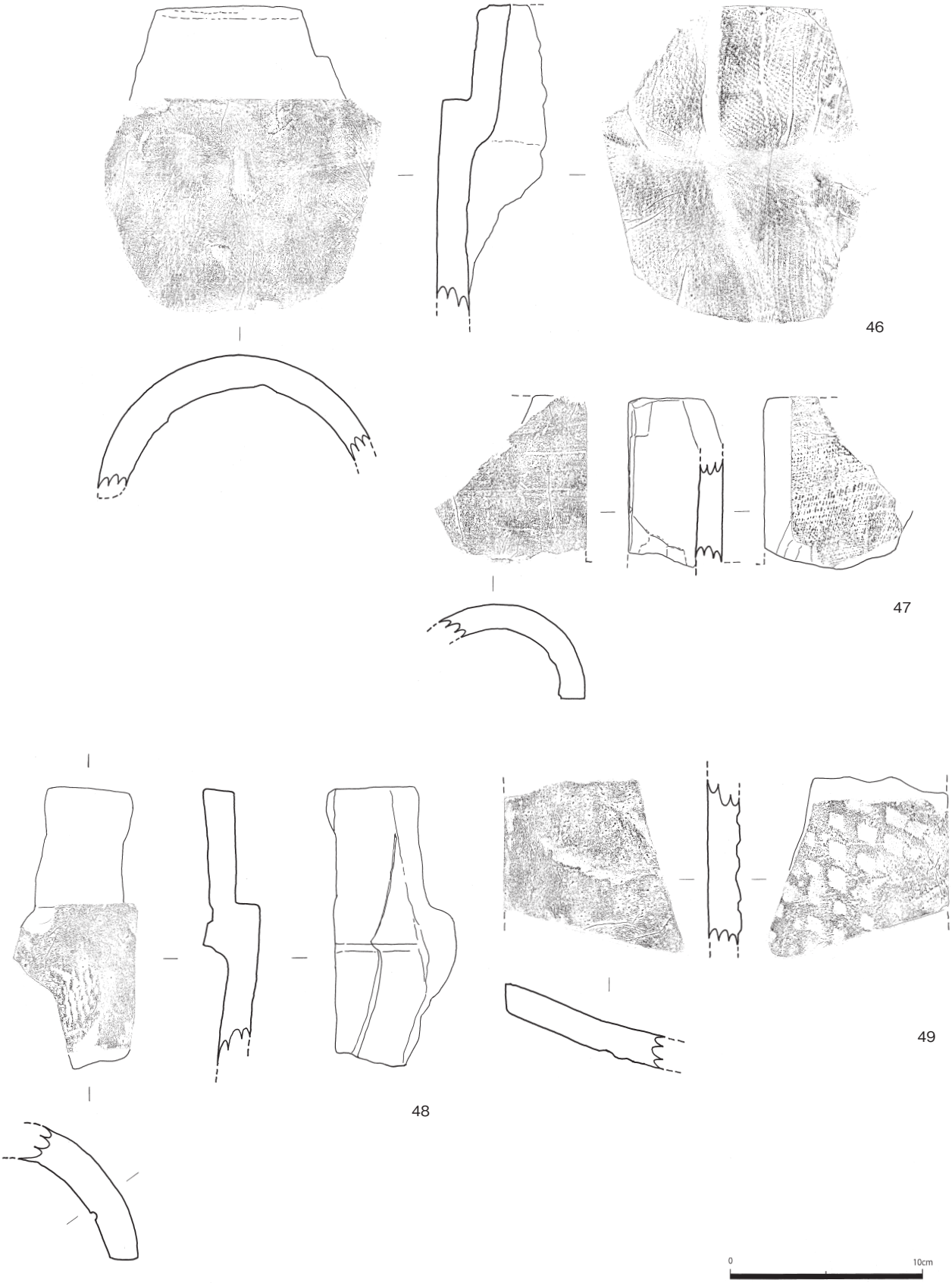


図 20　Ⅰ区出土遺物（1/3）

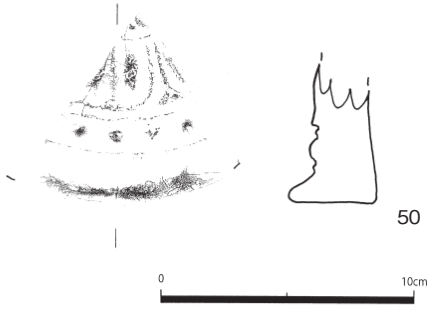


図21　Ⅰ区出土遺物（1/3）

は弥生土器とみられる底部片である。３６・３７は板材である。３６は端部に穴がみられ、３７は表面の摩耗が激しい。３６は厚さ1.2cm、幅5.7cm、長さ20.6cmである。３７は残存長19.2cm、残存幅6cm、残存厚1.5cmである。３８は木杭である。Ⅰ区南西部で発見された。径約2.3cm、残存長22.5cmである。

３９～５０は瓦である。３９～４２は平瓦であり、包含層から出土した。３９は凸面に左撚りの縄目叩きが、凹面に布目が確認できる。側面はヘラ切りが施されている。４０・４１は格子叩き目であり、正格子である。４０の凹面には布目がわずかにみられるものの、全体的にススが厚ぼったく付着している。側面はヘラ切りが施されている。４１の凹面は布目のちに部分的に横方向のナデが施されている。側面はヘラ切りである。４２は凹面には布目のちケズリが、凸面にはナデのちケズリが施されており、側面はヘラ切りである。４３～４５は丸瓦であり、包含層から出土した。４３～４５いずれも凹面に布目がみられ、凸面には工具などによるナデが施されている。４３の側面はヘラ切りが、４４の側面はヘラナデ、４５の側面にはヘラナデが施されている。４６～５０は遺構検出面で発見された。４６は丸瓦であり、凸面には左巻きの縄目が見られる。凹面は布目がみられ、一部工具によるナデがある。４７は丸瓦の端部である。凹面に布目がみられ、側面はヘラ切りである。４８は丸瓦であり、凸面に左撚りの縄目がみられる。凹面には布目がわずかに残るもののほとんどが摩耗している。側面端部の調整はヘラナデと思われる。一部に紐痕が残る。４９は平瓦であり、凸面に斜格子の叩き目がみられる。凹面には布目が残るものの摩滅ぎみである。側面にはヘラ切りが施されている。５０は軒丸瓦である。風化はしているが、外縁部に鋸歯文がある。老司式Ⅰ式かと思われるが不明瞭であるため断言はできない。1/8ほどが残存している。

Ⅱ区出土遺物（図２２、２３）

Ⅱ区を調査中に発見された遺物である。

５１は包含１層から発見された土師器の坏である。高台径8.6cm、残存高3.8cmである。内外面調整ともに大半が摩滅しているが、外面の底部付近にナデが残る。底部付近が1/4ほど残存している。５２～５７は包含２層から発見された。５２・５３は須恵器の蓋である。５２は口径13cm、残存高2.45cmである。内外面ともに回転ヨコナデを施しており、外面の上部には回転ヘラケズリがみられる。５３は残存高2.1cmである。内外面ともに回転ヨコナデが施されており、外面の上部に回転ヘラケズリがみられる。５４～５６は須恵器の坏である。５４は高台径9.2cm、残存高2.1cmである。内外面ともに底部付近はナデが施されており、内面の一部と高台に回転ヨコナデがみられる。底部付近が1/4ほど残存している。５５は高台径8.5cm、残存高2.1cmである。内外面ともに底部付近はナデが施されており、内面の一部と高台に回転ヨコナデがみられる。底部付近が1/2ほど残存している。５６は高台径10cm、高さ2.1cmである。内面はナデ、外面は底部付近がナデ、高台に回転ヨコナデが施されている。底部付近が1/4ほど残存している。５７は土師器の坏（埦）であり高台径6.4cm、残存高1.9cmである。内外面調整ともに摩滅しており不明である。底部付近が1/4ほど残存している。５８～６２は包含２層から３層を掘削中に発見された。５８～６０は須恵器の坏である。５８は高台径9cm、残存高2.3cmである。内面の残存部分上部と高台に回転ヨコナデが施されており、それ以外の部分にはナデがみられる。底部付近が1/6ほど残存している。５９は高台径8cm、残存高2.05cmである。内面

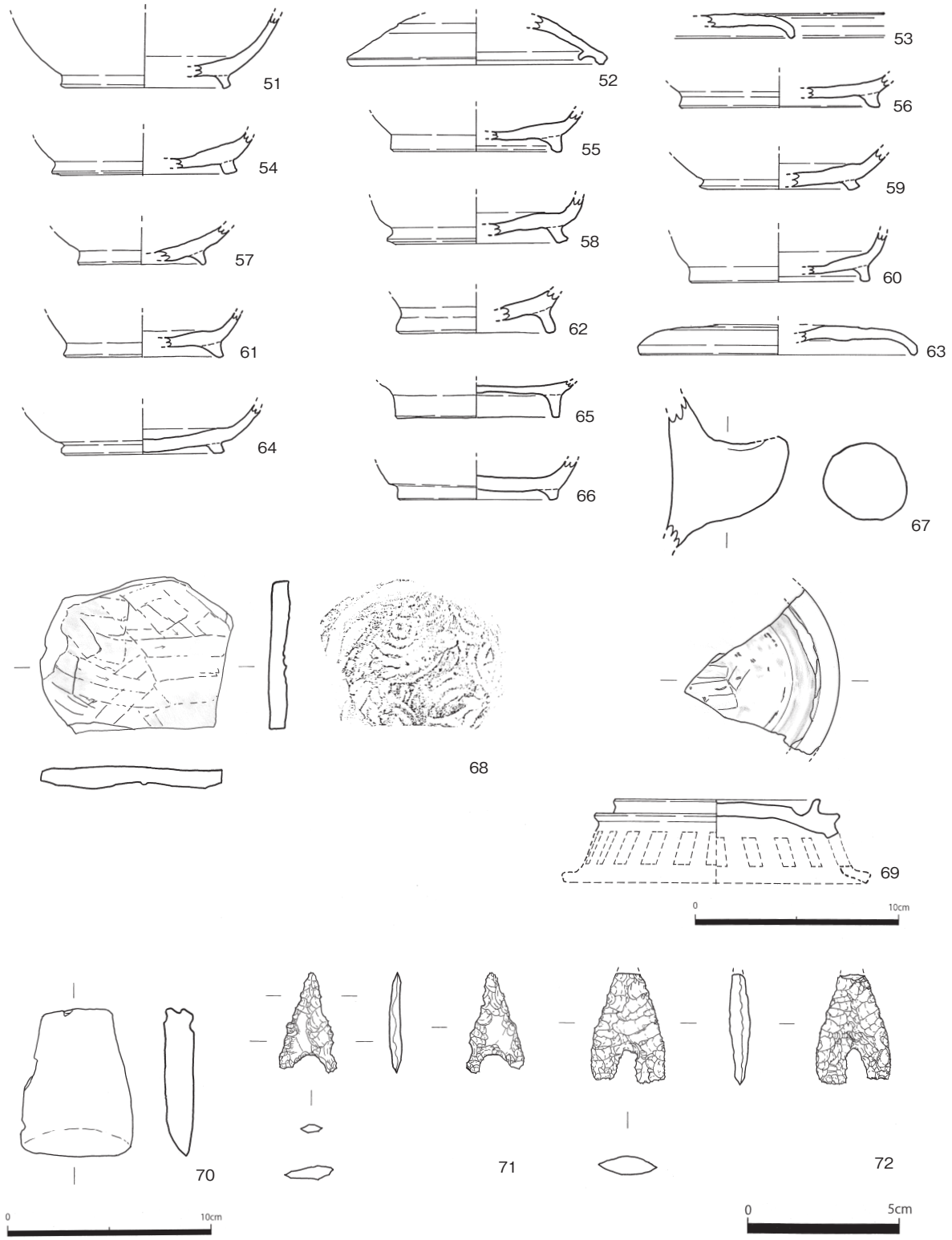


図 22　Ⅱ区出土遺物（1/3）（71・72：1/1）

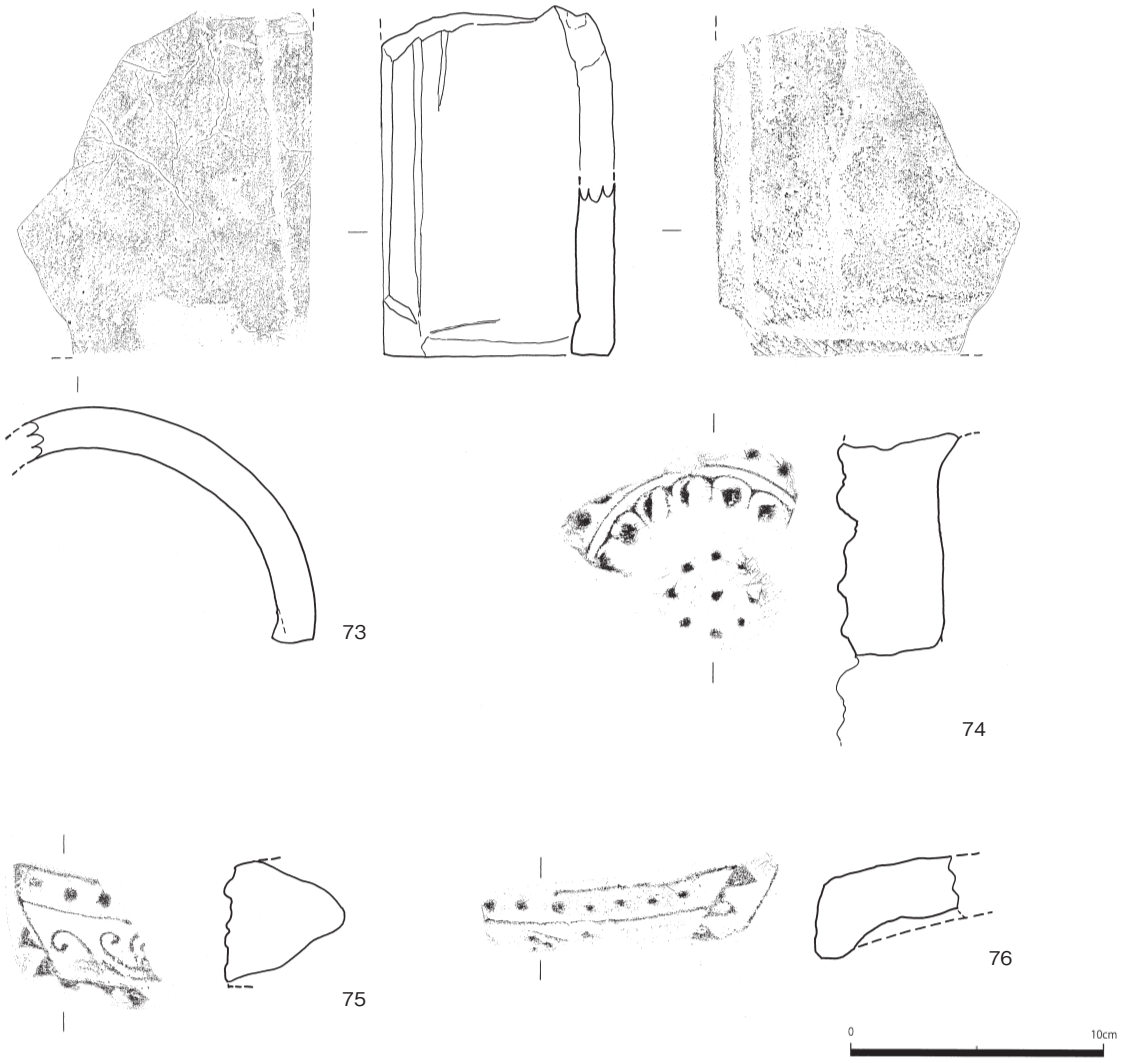


図 23　Ⅱ区出土遺物（1/3）

の残存部分上部と高台に回転ヨコナデが施されており、それ以外の部分にはナデがみられる。底部付近が 1/2 ほど残存している。６０は高台径 9cm、残存高さ 2.5cmである。内面の残存部分上部と高台に回転ヨコナデが施されており、それ以外の部分にはナデがみられる。底部付近が 1/4 ほど残存している。６１・６２は土師器の坏である。６１は高台径 8cm、残存高 2.2cmである。内外面調整ともに摩滅しており不明である。底部付近が 1/4 ほど残存している。６２は高台径 8cm、残存高 2.05cmである。内面調整は摩滅しており不明である。外面は底部付近がナデ、高台がヨコナデである。６３～６７は遺構検出面で発見されたものである。６３は須恵器の蓋である。口径 14cm、残存高 1.45cmである。外面上部は回転ヘラケズリ、内面上部はナデ、内外面ともに側面は回転ヨコナデである。頂点につまみがついたものと推測される。1/7ほどが残存している。６４は須恵器の坏である。高台径 8.1cm、残存高 2.6cmである。内面残存上部に回転ヨコナデ、底部付近にナデ、外面残存上部に回転ヘラケズリ、高台に回転ヨコナデ、底面にナデが施されている。底部付近が 1/2 ほど残存している。６５は土師器の坏である。高台径 8.2cm、残存高 1.8cmである。内外面ともにナデが施されており、高台はヨコ

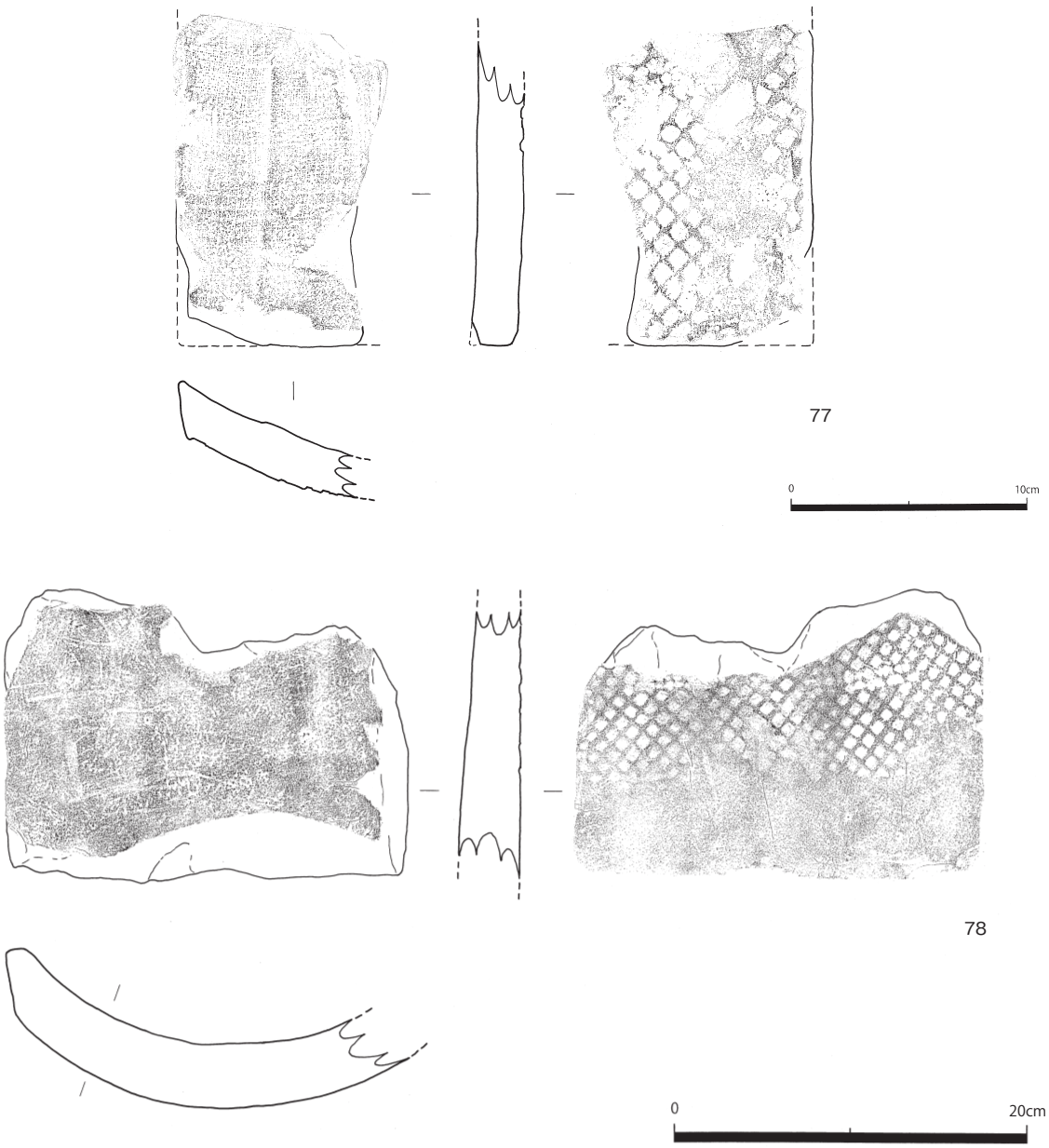


図 24　Ⅲ区出土遺物（77：1/3）（78：1/4）

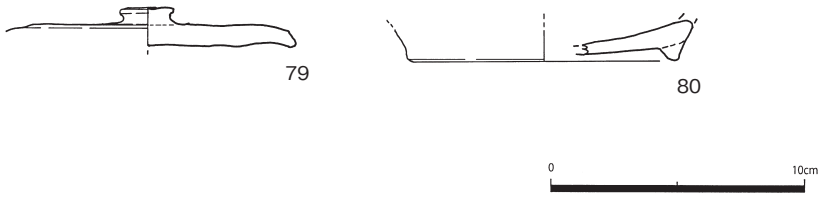


図 25　その他の遺構出土遺物（1/3）

ナデである。底部付近がわずかに残っている。６６は須恵器の坏である、高台径 8cm、残存高 1.95cm である。内外面共に底部付近はナデ、側面および高台は回転ヨコナデが施されている。６７は甑の把手である。内外目調整ともに摩滅しており不明である。６８は須恵器甕胴部片を転用した硯である。7.5 cm× 9.1cm、厚さ 1.05cmの大きさである。包含２層から３層にかけた掘削中に発見した。墨がわずかに残る。上面はすり目が残っており、硯として使用したとみられる上面とは裏側に同心円当具痕がみられる。６９は圏足円面硯の破片であり、圏足部に方形透かしを施す。上面の 1/6 が残っている。上部径 10.4cm、最大径 12.2cm、残存高 1.9cmである。遺構検出面での発見である。上面に墨が残っており、すり目がみられる。７０は扁平片刃石斧である。石材は凝灰質安山岩ホルンフェルスである。縦 7.4cm、刃幅 5.4cm、厚さ 1.4cm。包含３層から出土した。７１・７２は石鏃である。７１は包含２層、７２は包含３層から出土した。

７３～７６は瓦である。７３は丸瓦であり凸面に摩滅気味だが平行の叩きが、凹面に布目が残っている。側面はヘラナデが施されている。７４は軒丸瓦である。中房内には一＋八の円圏をめぐらせた蓮子があり、その周辺を短い蓮弁がめぐっている。老司式軒丸瓦の特徴には一致しないものである。包含１層から出土した。７５・７６は軒平瓦である。７５は老司式Ⅰ式かと思われるものの断言はできない。７６は摩耗が激しく調整方法を含めて不明である。７５は包含３層から、７６は遺構検出面で発見された。

Ⅲ区出土遺物（図２４）

Ⅲ区を調査中に発見された遺物である。

７７・７８ともに遺構検出面で発見された平瓦である。７７は凹面に布目、凸面に正格子のたたきがみられ、側面端部にはヘラナデが施されている。７８は凹面にナデ、凸面に正格子のたたきがみられる。７８のみ縮尺が異なるため正格子の大きさが異なるようにみえるが、７７と大きさはほぼかわらない。

その他遺構出土遺物（図２５）

７９・８０は SD-013 から出土した。７９は須恵器の蓋である。口径 11.8cm、残存高 1.6cmである。外面上部に回転ヘラケズリが見られる以外は回転ヨコナデが施されている。1/3 ほど残存している。８０は土師器である。器種は不明確だが坏と思われる。高台径 11.0cm、残存高 1.6cmである。内外面ともに摩滅しており、調整は不明である。底部付近が 1/5 ほど残存している。

Ⅳ．まとめ

今回の調査で発見された遺構は古代の掘立柱建物１棟、土坑３基、ピット１基、時期不明の溝２条と中世の水田面である。掘立柱建物は出土遺物などから８世紀ごろのものであると考えられ、三宅廃寺を構成する建物の一つであると考えられる。また出土した老司式軒丸・軒平瓦や円面硯、転用硯の存在から三宅廃寺が存在した可能性がまた高まったといえる。掘立柱建物 SB-041 は他の２号住居址や SB-51 に比べ、主軸が西寄りに傾いている。

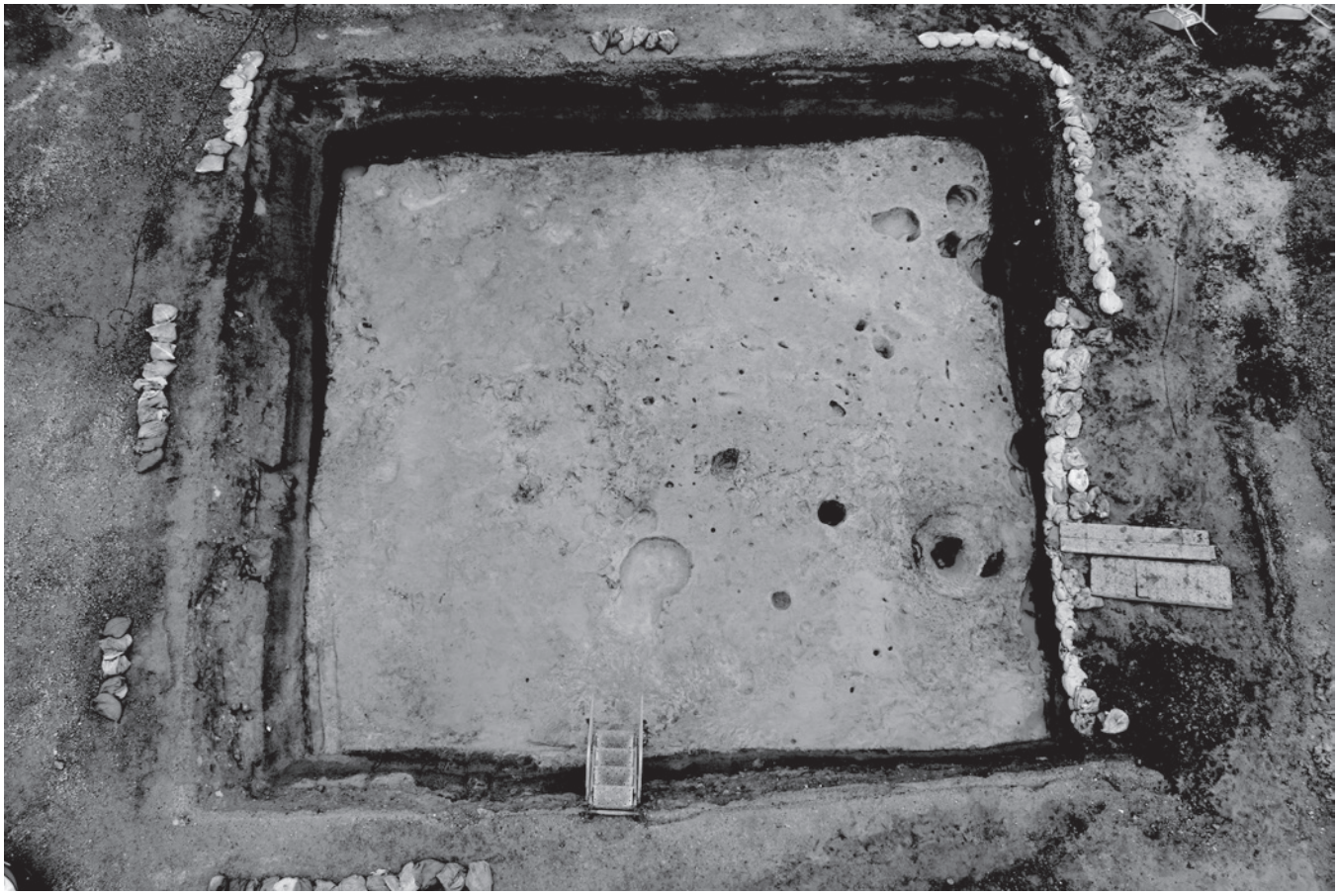
さて今回の調査区と第１次・第２次調査区の標高を比較すると第１次調査区と当調査区との高低差が＋１ｍ、第２次調査区と当調査区との高低差が＋２ｍとなることがわかった。このことから当該地域は西から東にかけて下がっていく地形となることが判明した。さらに第２次調査区と当調査区との距離はおおよそ 150 ｍであるため、西から東に向かって比較的急にさがっていることとなる（図２６参照）。このことから三宅廃寺周辺は今まで考えられてきたような比較的平坦な地形ではなく斜面の上に存在していた可能性がでてきた。加えてその高低差や出土遺物や区画溝らしき遺構などから、第２次調査区周辺が中心域である可能性が考えられる。そして当調査区は標高では一番低く、調査区の南東部においても中世の水田面以外の遺構は確認できなかったことから、当調査区が三宅廃寺の寺域の東限であったと考えられる。図２６は『三宅廃寺２』の Fig.49 に当調査区をはめ込んだものであるが、それをみてもわかるように、中心域から離れた場所であった可能性が高い。

今回の調査結果によって三宅廃寺という寺院跡であった可能性がより高まったといえる。またその地形の高低をふまえると、小高い丘陵の上に存在していたちょっとした山寺のような外観をとっていた可能性もでてきたといえよう。そのため今後周辺を調査する際には地形復元にも力をいれるべきであるといえる。

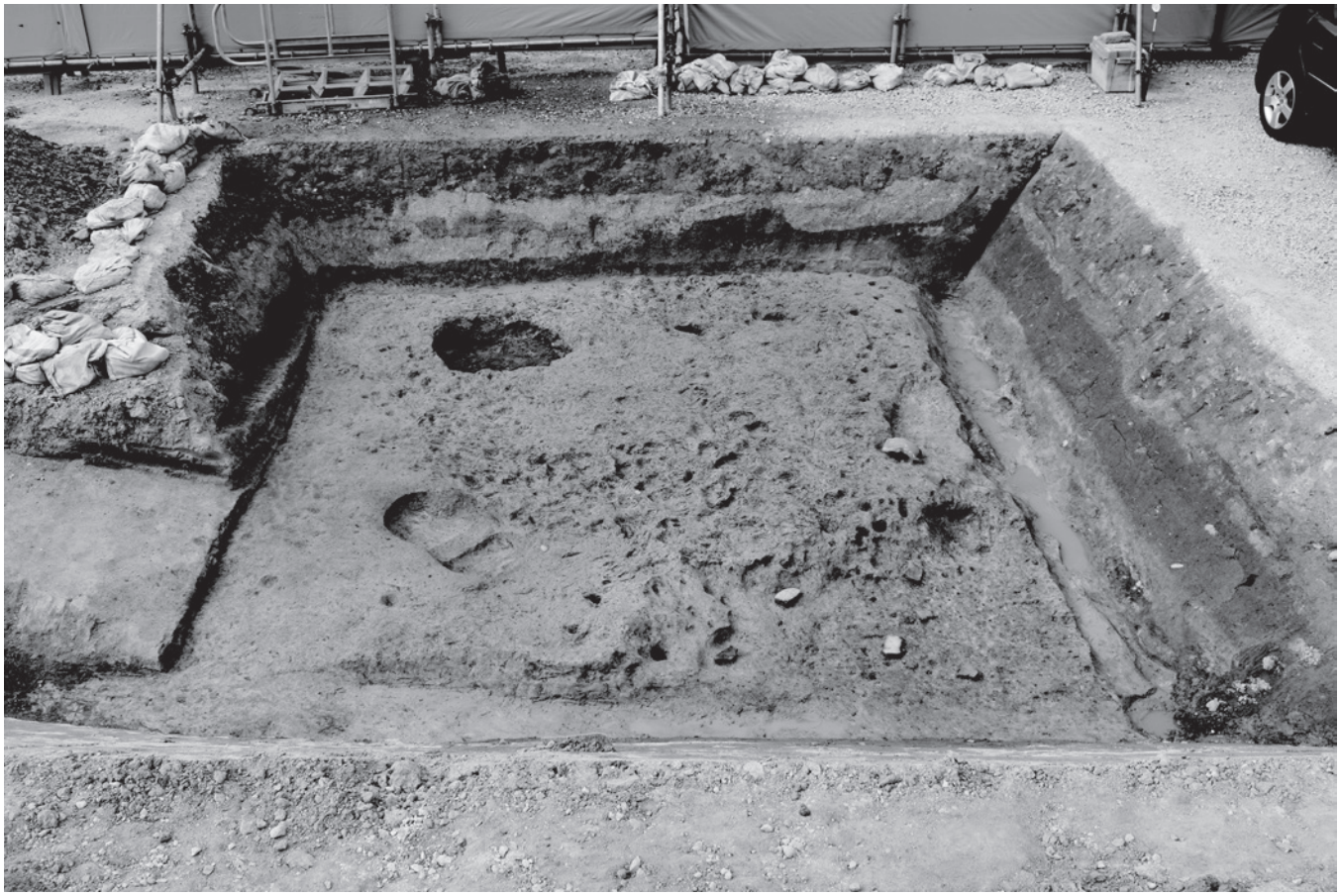
図 26　三宅遺跡群高低差模式図（縮尺不統一）

図　　版

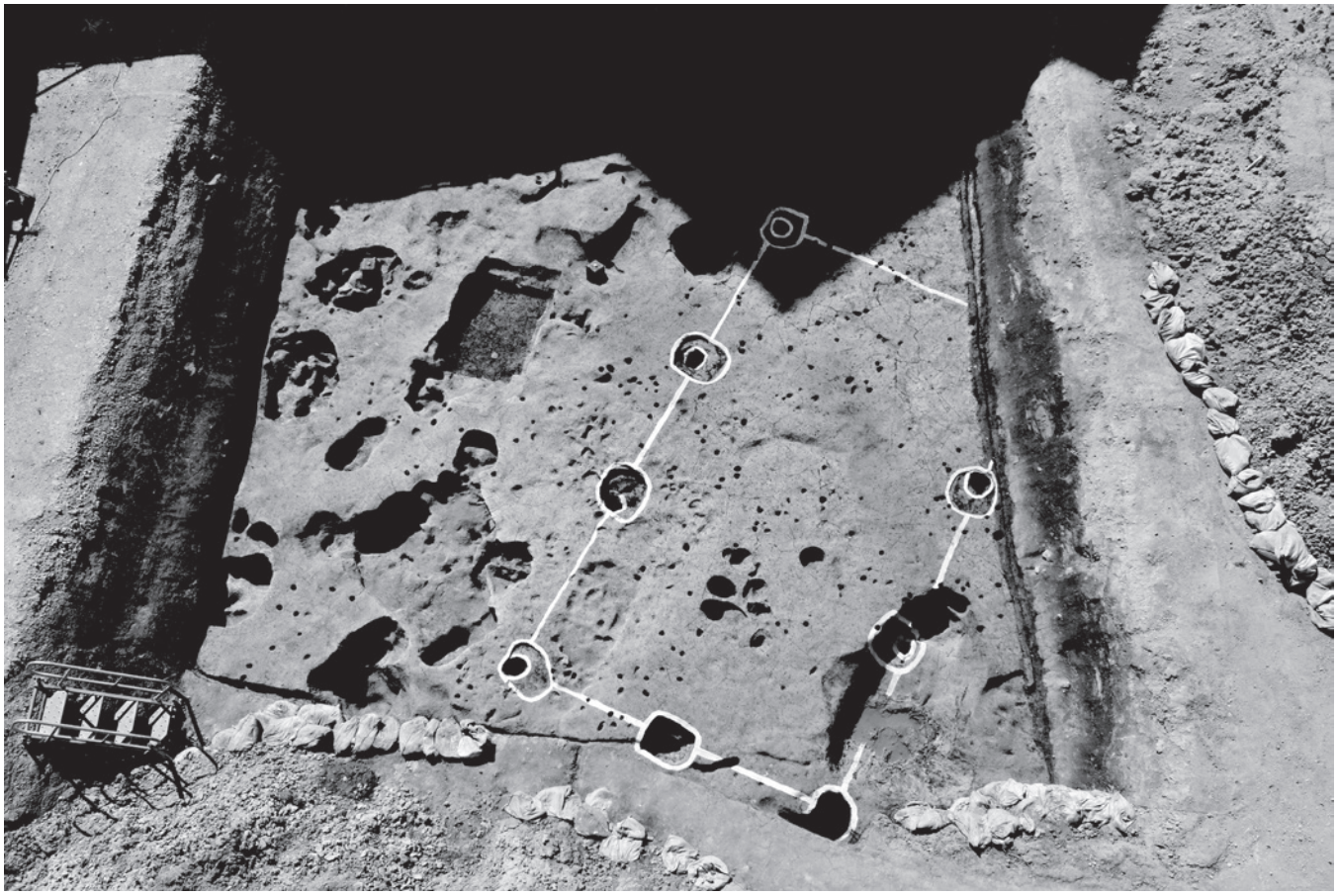
図 版 1



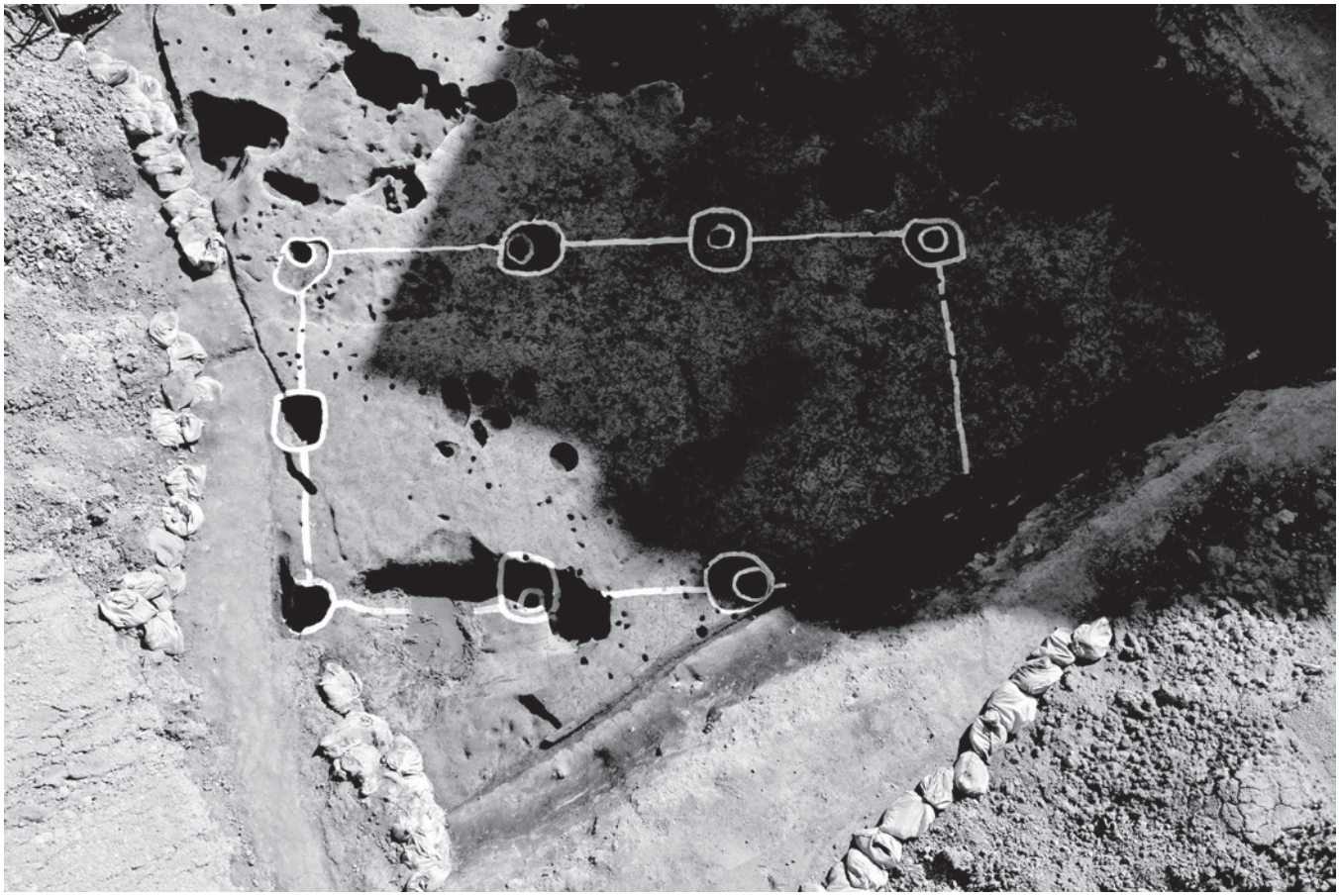
1．Ⅰ区全景（北から）



2．Ⅲ区全景（北から）



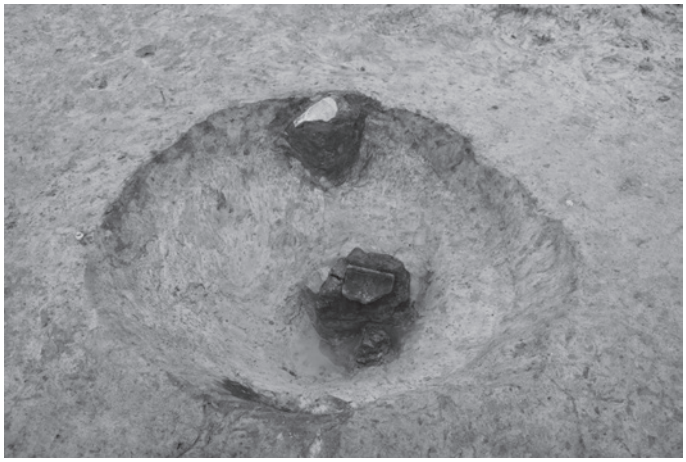
1．Ⅱ区全景（東から）



2．ＳＢ―０４１全景（北から）

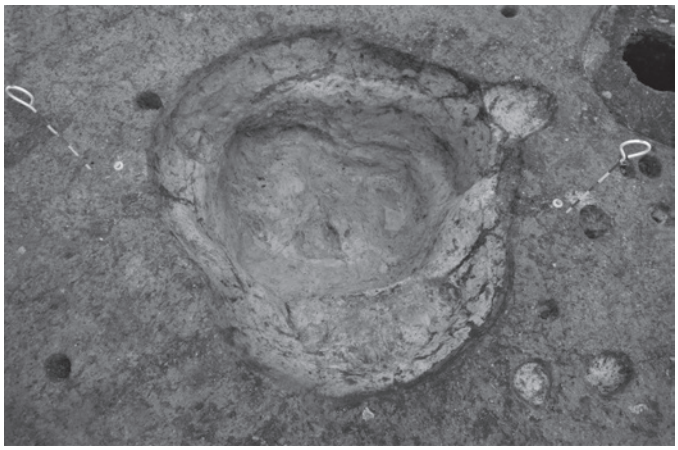
図 版 3

1．SK-001 土層（西から）



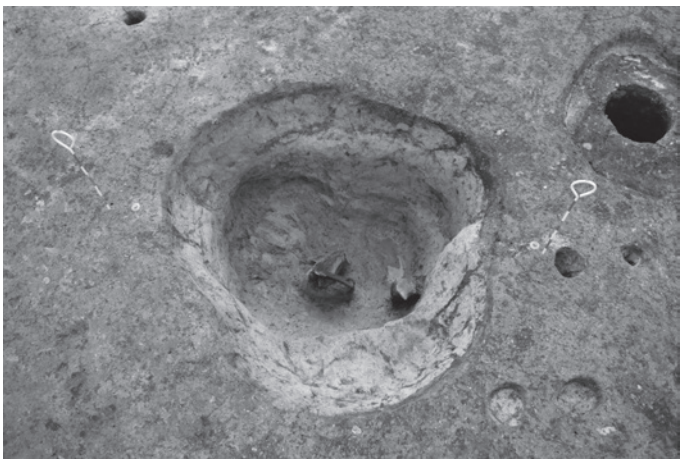
2．SK-001（西から）

3．SK-004 土層（西から）



4．SK-004 完掘（東から）

5．SK-014 土層（東から）



6．SK-014（東から）

報 告 書 抄 録

ふりがな	みやけいせきぐん１
書名	三宅遺跡群１
副書名	―第７次調査報告―
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1433 集
編著者名	三浦　萌
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621　福岡市中央区天神１丁目８番１号
発行年月日	2021 年 3 月 25 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
三宅遺跡群（みやけいせきぐん）	福岡県福岡市（ふくおかけんふくおかし）南区南大橋（みなみくみなみおおはし）１丁目（１ちょうめ）1169-1、1170-4	43134	2825	33°33′13.03″	130°25′25.94″	20190722～20191025	276.11㎡	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三宅遺跡群	寺院	古代・中世	掘立柱建物、土坑、溝、水田	須恵器、土師器、瓦、圏足円面硯	三宅廃寺の寺域に相当する建物とみられる掘立柱建物の検出

要約

三宅遺跡群は主に奈良～平安時代の遺跡によって構成されている遺跡群である。2015 年に三宅Ａ遺跡、三宅廃寺、三宅瓦窯跡、三宅岩野瓦窯跡、そして大橋Ｃ・Ｄ遺跡を包含して称されることとなった。過去においては「三宅廃寺」「三宅Ａ遺跡」として調査がされており、今回は数えて７度目の調査となる。

本調査区は三宅廃寺第１次調査地点に隣接している。本調査区で検出された遺構は古代の掘立柱建物が１棟、土坑３基、溝２条、杭跡と考えられるピット群、そして中世の水田面である。出土遺物等のほとんどは瓦である。掘立柱建物は２間×３間の規模が確認できており、三宅廃寺の寺院域を構成する建物である可能性が非常に高い。また過去の第２次調査地点から本調査区にかけての高低差が２ｍあることから、従来考えられていたような平坦な地形ではない可能性がでてきた。

三宅遺跡群１

―第７次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1433 集

2021 年（令和３年）３月 25 日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　株式会社 九州カスタム印刷

福岡市博多区東比恵 3-16-15